九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査概報

——日田～玖珠間——

第　2　集

後迫・大迫・白岩・下綾垣・瀬戸遺跡

1992.3

大分県教育委員会

巻頭図版

白岩遺跡（丘陵斜面には環濠が認められ、頂部は平坦地がある。後方には玖珠盆地の平野を望む。）

例　　言

1、本書は九州横断自動車道の日田～玖珠間建設工事に伴う埋蔵文化財調査のうち、平成3年度に実施した遺跡群の概要報告である。

2、発掘調査は日本道路公団福岡建設局の委託事業として、大分県教育委員会が実施した。

3、調査団の構成は次のとおりである。

調査委員　賀川　光夫（別府大学教授、県文化財保護審議会委員）
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議会委員）
都出比呂志（大阪大学教授）
後藤　宗俊（別府大学教授）
下条　信行（愛媛大学教授）
伊藤　晴明（島根大学教授）
時枝　克安（島根大学助教授）
武末　純一（北九州考古博物館副館長）
秋葉　正嗣（大分県教育庁管理部文化課長）

調査主任　渋谷　忠章（県文化課埋蔵文化財第2係長）

調 査 員　村上　久和（県文化課主査）、西　哲弘（同主査）、江田　豊（同主任）
友岡　信彦（同主任）、染矢　和徳（同主事）、永松　みゆき（同嘱託）
山本健太郎（同嘱託）、橋本　一彦（同嘱託）、須原　緑（同嘱託）

調査補助員　松本　直子、金　宰賢、Lise, Hotdgkinson（以上九州大学）、伊　英明（専修大学）、岡　崇、柏木　善治（以上別府大学）

4、本紙の執筆は調査担当者で分担し、編集は村上、西、友岡、染矢で行った。

本　文　目　次

Ⅰ　平成３年度調査の概要……1
Ⅱ　日田地区の調査……3
　１．後迫遺跡……4
　２．大迫遺跡……14
　３．有田横枕遺跡……25
　４．七ッ枝遺跡……26
Ⅲ　玖珠地区の調査……27
　１．谷ノ瀬遺跡……28
　２．白岩遺跡……30
　３．下綾垣横穴群Ａ・Ｂ地区……34
　４．下綾垣遺跡……35
　５．池ノ原Ａ・Ｂ地区……45
　６．治別当遺跡……46
　７．瀬戸古墳群……49
　８．瀬戸遺跡……54

挿　図　目　次

第１図　日田地区遺跡分布図……3
第２図　後迫遺跡周辺地形図……4
第３図　後迫遺跡遺構配置図……5・6
第４図　後迫遺跡５号住居跡実測図……7
第５図　後迫遺跡８号住居跡実測図……8
第６図　後迫遺跡８号住居跡出土遺物実測図……9
第７図　後迫遺跡１号土坑実測図……10
第８図　後迫遺跡２号甕棺墓実測図……11
第９図　後迫遺跡３号甕棺墓実測図……11
第10図　大迫遺跡周辺地形図……14
第11図　大迫遺跡遺構配置図……15
第12図　大迫遺跡３号墓実測図……16
第13図　大迫遺跡21号墓実測図……17
第14図　大迫遺跡22号墓実測図……18

第15図　大迫遺跡23号墓実測図……19
第16図　大迫遺跡３・21・23号墓出土鉄器実測図……20
第17図　大迫遺跡23号墓出土鉄器実測図……21
第18図　有田横枕遺跡周辺地形図……25
第19図　有田横枕遺跡遺構配置図……25
第20図　七ッ枝遺跡周辺地形図……26
第21図　七ッ枝遺跡遺構配置図……26
第22図　玖珠地区遺跡分布図……27
第23図　谷ノ瀬遺跡周辺地形図……28
第24図　谷ノ瀬遺跡出土遺物実測図……28
第25図　谷ノ瀬遺跡遺構配置図……29
第26図　白岩遺跡周辺地形図……30
第27図　白岩遺跡遺構配置図……31
第28図　白岩遺跡１号環濠土層図……31
第29図　白岩遺跡出土遺物実測図……33
第30図　下綾垣横穴群Ａ・Ｂ地区周辺地形図……34
第31図　下綾垣遺跡周辺地形図……35
第32図　下綾垣遺跡遺構配置図……36
第33図　下綾垣遺跡５号住居跡実測図……37
第34図　下綾垣遺跡５号住居跡出土遺物実測図……38
第35図　下綾垣遺跡５号住居跡カマド実測図……39
第36図　下綾垣遺跡１号墓実測図……40
第37図　下綾垣遺跡１号墓主体部実測図……41
第38図　下綾垣遺跡１号墓主体部出土土器実測図……41
第39図　池ノ原Ａ・Ｂ地区周辺地形図……45
第40図　治別当遺跡Ｂ地区周辺地形図……46
第41図　治別当遺跡Ｂ地区出土遺物実測図……46
第42図　治別当遺跡Ｂ地区遺構配置図……47
第43図　瀬戸古墳群周辺地形図……49
第44図　瀬戸古墳群遺構配置図……50
第45図　瀬戸１号墳墳丘図……51
第46図　瀬戸１号墳墳丘土層図……52
第47図　瀬戸遺跡周辺地形図……54
第48図　瀬戸遺跡出土遺物実測図……54
第49図　瀬戸遺跡遺構配置図……55

Ⅰ　平成３年度調査の概要

九州横断自動車道（日田～玖珠間）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和63年度から用地買収の終了した場所を中心に開始され本年度で４年次を迎えた。

本年度は日田市内及び玖珠町内で15ヶ所の調査を実施したが途中、県下に大きな被害をもたらした「台風19号」の影響で、現場事務所の到壊など思わぬ災害を被り、一部図面を損失する事態も生じたが、ほぼ計画どおりに調査は進捗した。以下、その概要を述べることにする。

（後迫遺跡）　本調査を実施。弥生時代後期を中心とする集落跡、墓地を検出。途中、遺跡内を東西に貫ぬく市道用松羽野原線の付替工事を行った。なお、次年度継続調査を実施する。

（日田条里遺跡）　本年度用地買収の終了した場所の試掘調査を実施。その結果、古墳時代の竪穴住居群を検出。本調査は日程の関係から次年度以降行うことにした。

（大迫遺跡）　平成２年度からの継続調査である。古墳時代前期の石棺・土壙墓群を検出し調査を終了した。

（有田横枕遺跡）　道路建設予定地に隣接する場所で遺跡の所在が確認されたため、調査対象地となった遺跡である。調査の結果、時期不明の溝を１条検出した。

（七ッ枝遺跡）　時期不明の柱穴群を検出して調査を終了した。

（谷ノ瀬遺跡）　昨年度に引き続き本調査を実施。弥生時代中期のピット、古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良末～平安時代初頭の炭窯等を検出し調査を終了した。

（白岩遺跡）　弥生時代後期前半を中心とする時期の環濠・土坑などを検出。遺跡の立地条件から弥生時代後期の高地性集落と推定される。

（下綾垣横穴墓群）　試掘調査を実施。その結果、後世の開発のためか遺物・遺構とも顕著な検出はなかった。

（下綾垣遺跡）　本調査を実施。古墳時代の住居跡18軒、掘立柱建物５軒などを確認して調査を終了した。

（池ノ原遺跡）　試掘調査の結果、遺物・遺構とも顕著な検出はなかった。

（上ノ原遺跡）　試掘調査の結果、古墳時代後期の横穴墓29基と附属する墓道・テラス状遺構等を確認。さらに続く斜面にも横穴墓が確認されており次年度に本調査を行うこととした。

（治別当遺跡）　昨年度に引続き用地買収の終了した場所を中心に調査を行い、大溝１条等を検出。本格的な調査は次年度に実施する予定である。

（瀬戸古墳群）　新発見の古墳群である。古墳時代前期の円墳２基・方墳４基を検出し、そのうちの１基は竪穴式石室をもつもので玖珠地域では初例の出土である。

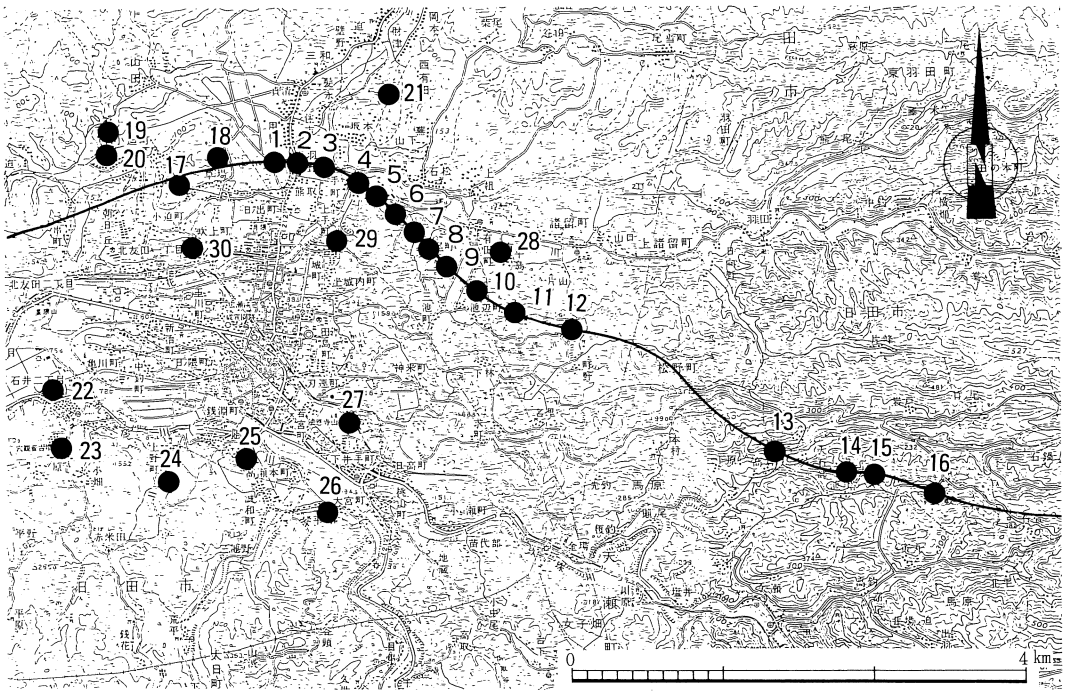
（瀬戸遺跡）　弥生時代中期の竪穴住居及び鎌倉時代の掘立柱建物、土坑、竪穴などを検出した。

（帆足城跡）　竹木の伐採をしたのち、縮尺1/500の空中写真撮影図化を実施した。その後、試掘調査を行なった。本格的な調査は次年度以降実施する予定である。（西）

No.	遺跡名	所在地	調査面積	時代	遺跡の概要	備考
1	後迫遺跡	日田市大字渡里字後迫	15,000㎡	弥生	竪穴住居跡、貯蔵穴、カメ棺墓	調査残
2	日田条里遺跡	日田市大字三和字五反田他	24,300㎡	古墳	竪穴住居跡	調査残
3	大迫遺跡	日田市大字有田字大迫	900㎡	古墳	石棺、土壙墓、石蓋土壙墓	
4	有田横枕遺跡	日田市大字有田字横枕	8,000㎡		溝	
5	七ッ枝遺跡	日田市大字東有田字七ッ枝	6,000㎡	近世～	掘立柱建物、棚列	
6	谷ノ瀬遺跡	玖珠郡玖珠町大字戸畑字谷ノ瀬	5,400㎡	弥生・古墳・古代	竪穴住居跡、炭窯、溝、包含層	
7	白岩遺跡	玖珠郡玖珠町大字四日市字白岩	3,000㎡	弥生	溝、焼土ピット、柱穴、土壙	
8	下綾垣横穴群	玖珠郡玖珠町大字綾垣字下綾垣	5,600㎡			
9	下綾垣遺跡	玖珠郡玖珠町大字綾垣字下綾垣	4,000㎡	古墳・古代	竪穴住居跡、掘立柱建物、溝、土壙墓	
10	池ノ原遺跡	玖珠郡玖珠町大字綾垣字池ノ原	1,300㎡			
11	上ノ原遺跡	玖珠郡玖珠町大字四日市字上ノ原	1,900㎡	古墳～奈良	横穴墓	調査残
12	治別当遺跡	玖珠郡玖珠町大字四日市字治別当	26,900㎡	弥生～古墳	溝	調査残
13	瀬戸古墳群	玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸	500㎡	古墳	古墳	調査残
14	瀬戸遺跡	玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸	2,200㎡	弥生・中世	竪穴住居跡、掘立柱建物、竪穴	調査残
15	帆足遺跡	玖珠郡玖珠町大字帆足字獅子川	9,000㎡	中世		調査残

表１　平成３年度九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概要

II　日田地区の調査



第１図　日田地区遺跡分布図

1．後迫遺跡	**2．羽野横穴墓群**	**3．日田条里遺跡群**	**4．夕田横穴墓群**
5．夕田古墳	**6．佐寺原遺跡**	**7．堂園遺跡**	**8．中尾原遺跡**
9．大迫遺跡	**10．尾漕遺跡**	**11．有田塚ヶ原古墳**	**12．有田横枕遺跡**
13．参勤交代道路	**14．七ッ枝遺跡**	**15．鹿倉遺跡Ｂ地区**	**16．薮地区**
17．小迫辻原遺跡	**18．草場第二遺跡**	19．朝日宮ノ原遺跡	20．天満古墳群
21．葛原遺跡	22．ガランドヤ古墳群	23．穴観音古墳	24．上野第１遺跡
25．姫塚古墳	26．高瀬遺跡	27．法恩寺山古墳群	28．平島遺跡
29．慈眼山遺跡	30．吹上遺跡		（太字は横断道関係）

1．後迫遺跡

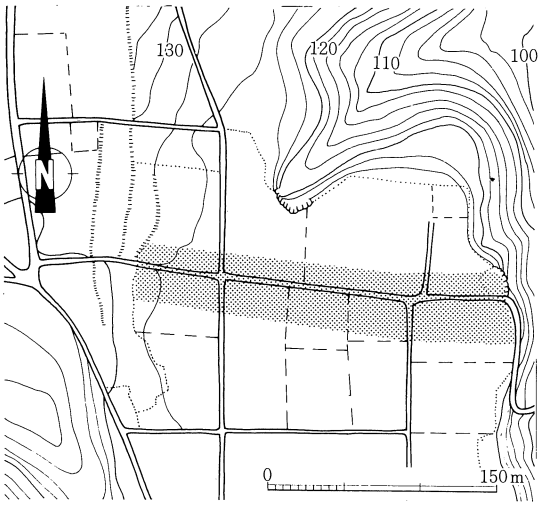
• 遺跡の所在地

日田市大字渡里字後迫

• 調査面積　15,000㎡

• 遺跡の概要

遺跡は日田盆地の北部、標高約125mの山田原台地上にあり盆地との比高差は約30mである。同台地上には草場第二遺跡、小迫辻原遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての大集落・墓地群がみられる。調査区は台地の東端部に位置し、さらに東側斜面には羽野横穴墓群がある。



第２図　後迫遺跡周辺地形図

調査はまず一段高い西端部分に二本のトレンチを入れて確認調査を行ったが、遺構は検出されなかった。これは調査区周辺が昭和40年代に行われた土地区画整備事業によって削平されたためと考えられる。しかし他の部分については遺存状態は良好で、特に調査区西側部分については埋土であったと思われ、地表から１m以上掘り下げたにもかかわらず深い住居跡では約60cmを残す。本調査は南側部分から行い竪穴式住居跡25軒、土坑11基、小児用甕棺墓５基、掘立柱建物１棟、柱穴群などが現在までに確認されている。弥生時代中期から後期にかけての遺構がほとんどであるが、奈良時代の須恵器と土師器が出土した土坑もあり、またこの時期の遺物がかなり散布していることから長い期間営まれてきた遺跡のようである。しかし古墳時代においては今年度の調査では遺構は検出されていない。未発掘である東側は石棺が検出されており、周辺に棺材が散材していることから墓地になる可能性がある。

住居跡は確認されているもののうち一軒の円形住居跡を除いて全て方形であり、そのほとんどがベット状遺構を持つ弥生時代後期のものである。中央から東側部分は切り合いが少ないが、西側部分においては複雑に切り合っている。なお、現在までに石庖丁が20個体ほど出土している。このことから、出土した土器の型式なども含めて北部九州の影響を受けていたことがうかがえる。

今回の調査では道路幅という限られた範囲であるため全体を把握することは出来ない。しかし、調査区周辺に相当規模の集落が展開すると考えられ、今後その確認調査が望まれる。なお来年度も引き続き調査を行う。

第３図　後迫遺跡・遺構配置図

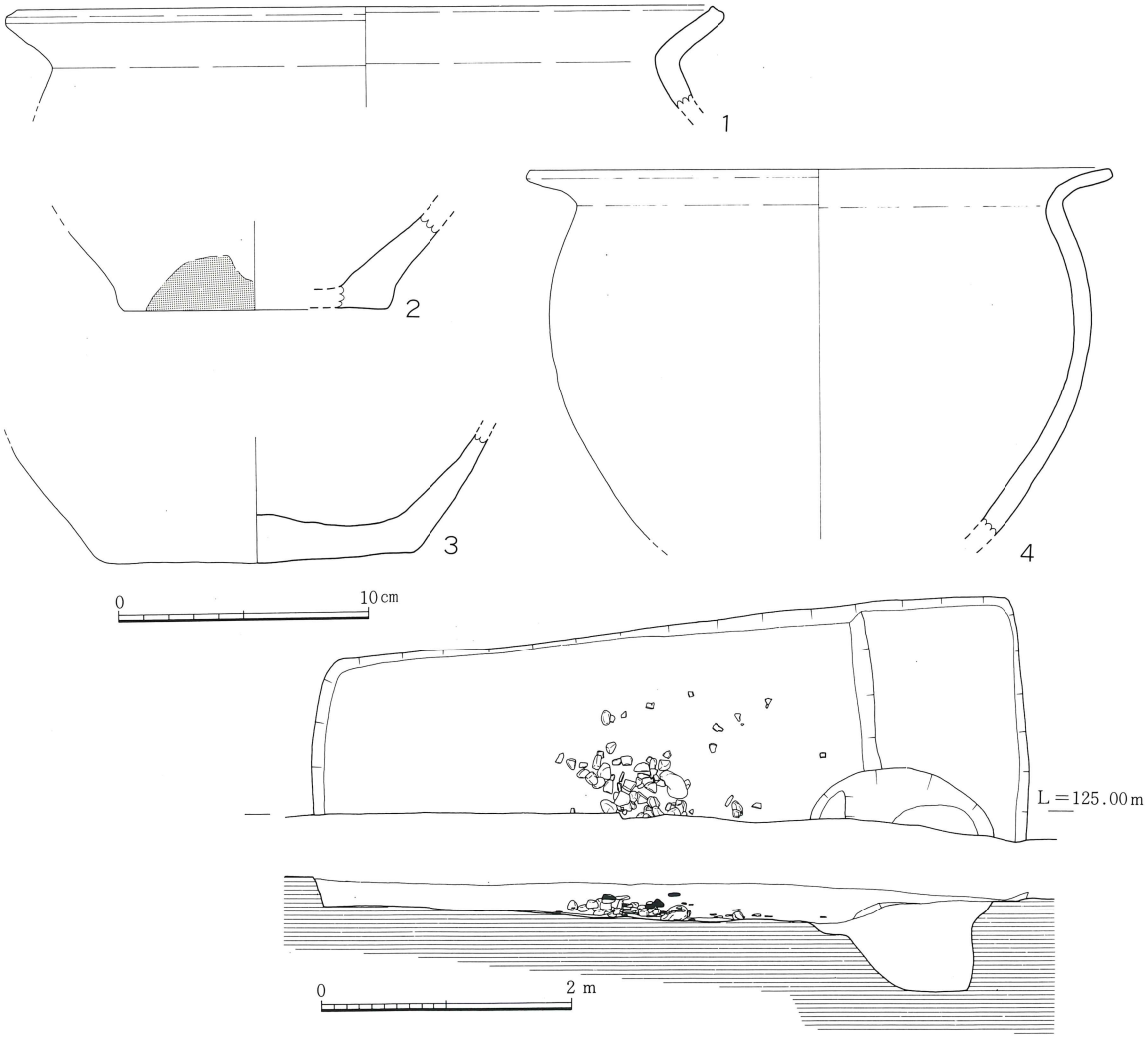
住居跡

住居跡は現在までに25軒を検出している。そのうち、円形住居跡を一軒確認した以外は全て方形で、そのほとんどがベット状遺構をもつ弥生時代後期のものである。ベット状遺構はプランの片側のみにもつタイプ、両側にもつタイプ、四隅にもつタイプ、「コ」の字形にもつタイプ、「L」字状にもつタイプに分けられる。

5号住居跡

5号住居跡は、調査区の南側中央のやや西寄りにある。その平面プランは東西5.7m、南北は南辺が調査区外のため不明であるが2m以上、深さ約0.25mで東側に幅1.1m、高さ0.1mのベット状遺構をもつ。東側中央付近に貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。主柱穴は不明である。

出土遺物（第4図1～4）　1・2は甕で、1は「く」の字口縁で端部がわずかに跳上がる。復元口径は27.8cm。3は壺の底部、4は広口の甕形土器で復元口径は23.2cmである。弥生時代後



第4図　後迫遺跡5号住居跡実測図

期前半と考えられる。

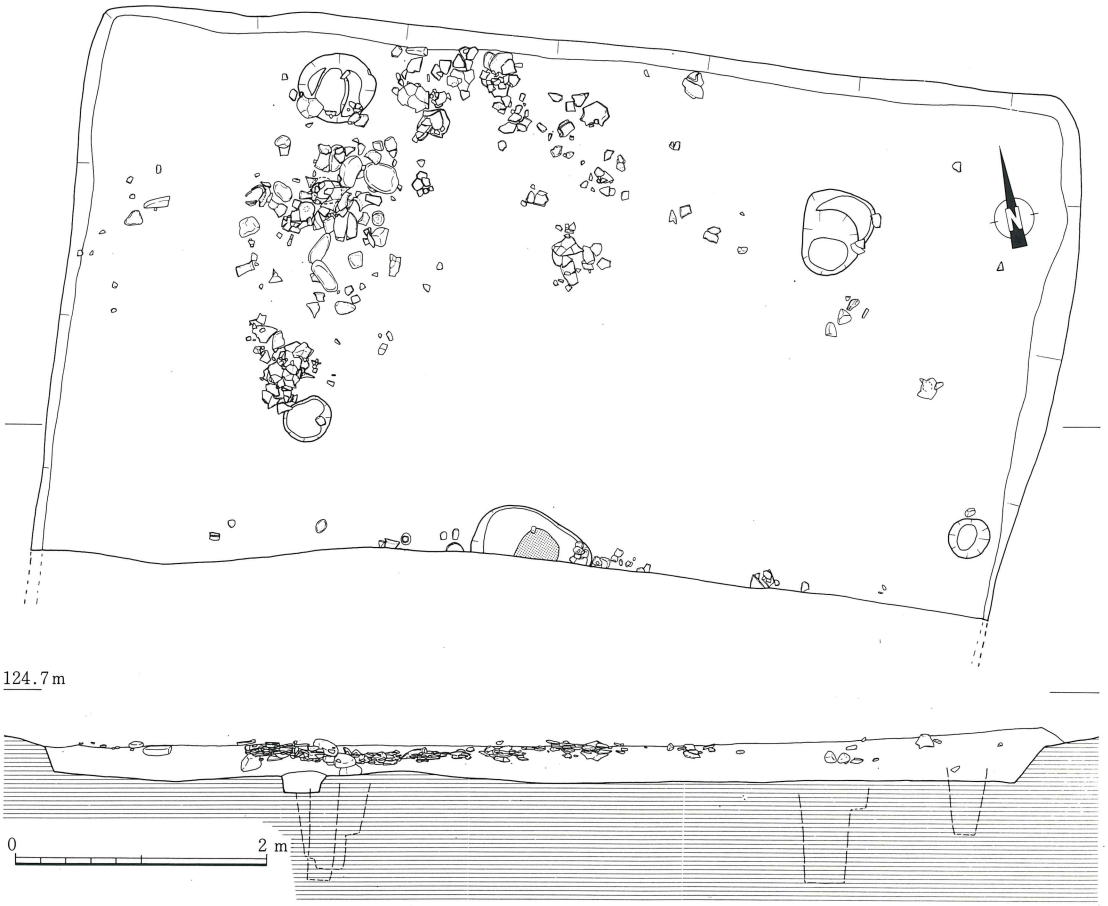
８号住居跡

８号住居跡は調査区の南側中央付近にある。その規模は東西7.7m、南北は調査区外のため不明であるが４ｍ以上、深さ0.1ｍで、平面プランは隅丸方形になると思われる。床面には貼り床が認められ、厚さ約0.1ｍである。主柱穴は４本と考えられるが、そのうち２本検出されており深さ0.7ｍ、心々距離は４ｍである。ほぼ中央に深さ約0.1ｍの炉跡が確認された。

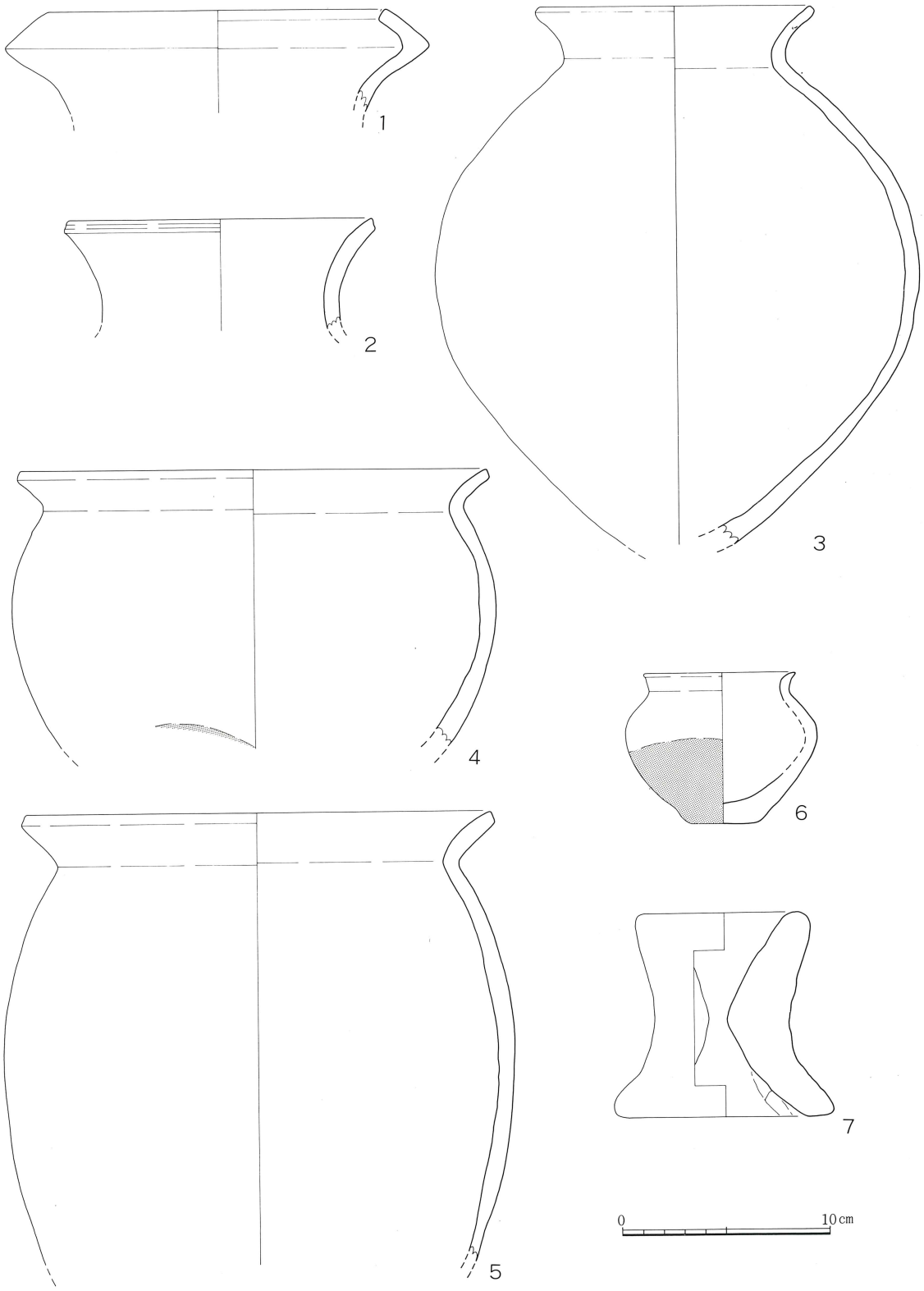
出土遺物（第６図）１～３、６は壺である。１は袋状口縁壺で復元口径16cm、２は単口縁で復元口径14.6cm、３は「く」の字口縁をもち、胴中位で大きく張る。復元口径、胴部最大径はそれぞれ13cmと23cmである。６は一部口縁を欠いているが、ほぼ完形の小型壺である。４は甕形土器で復元口径22.4cm、５は口縁が「く」の字状の甕で復元口径22.4cmである。７は小型で厚手の器台である。器高9.8cm、口径7.2cmの完形品である。弥生時代後期前半と考えられる。

１号土坑

１号土坑は調査区南側中央のやや西寄りにある貯蔵穴である。床面は隋円不定形で壁がほぼ直立する。規模は1.9ｍ×2ｍで深さ0.75ｍを残す。上屋の存在を想定させる床面柱穴は検出され



第５図　後迫遺跡８号住居跡実測図



第６図　後迫遺跡８号住居跡出土遺物実測図

なかった。現在までに貯蔵穴と考えられる遺構はこの１号土坑と５号住居跡内の土坑だけである。

甕棺墓

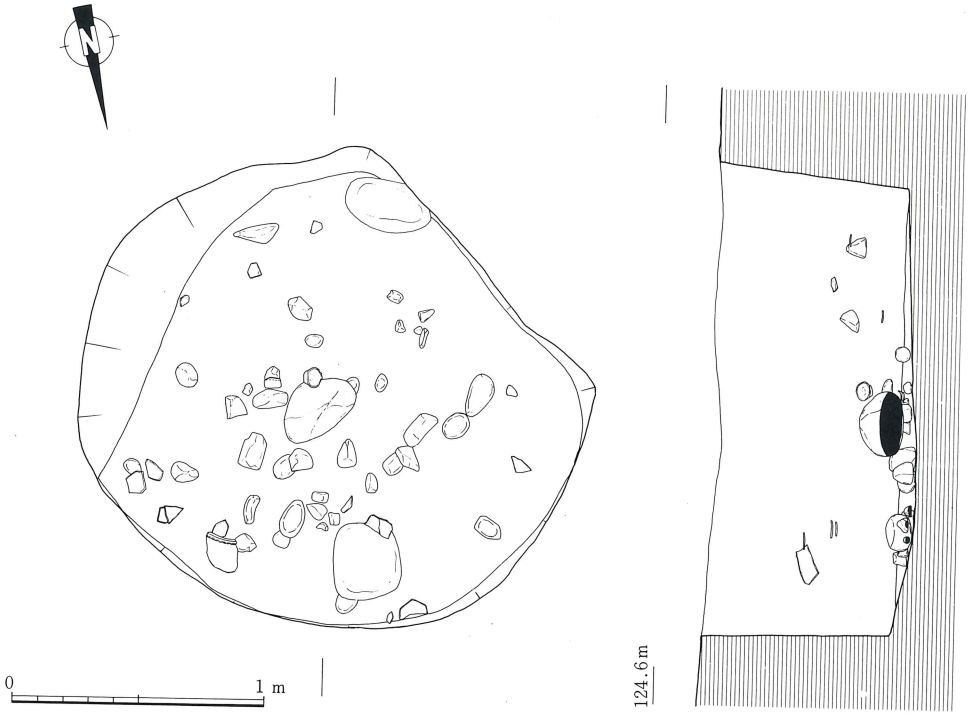
甕棺墓は現在５基検出されており調査が進めばまだ増えてくると思われる。全て小児用の合口で分布状況は１か所のみ２基がまとまっている以外は単独であり、いわゆる墓域形成は調査区内では確認されていない。

２号甕棺墓

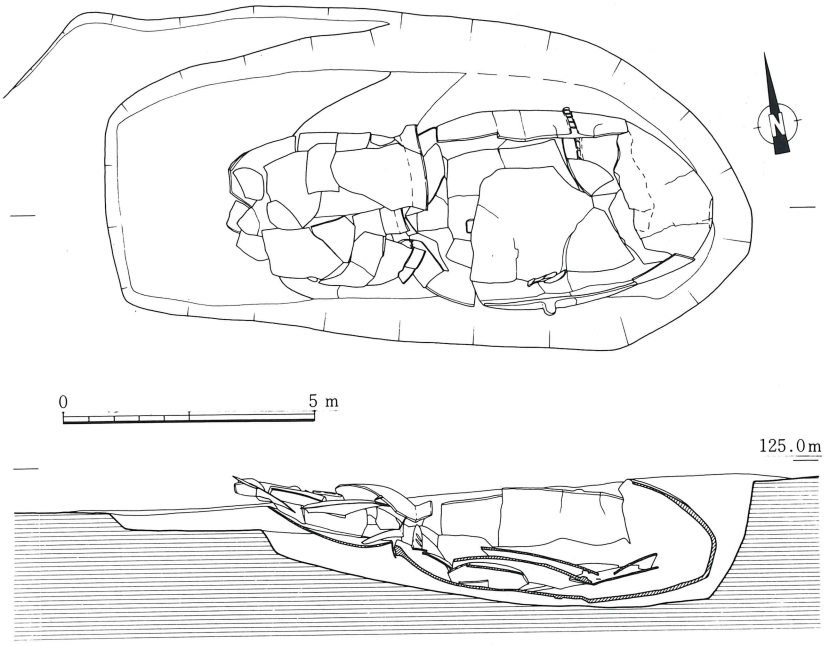
２号甕棺墓は合口で、下甕の口縁を打ち欠いて上甕を合わせている。下甕は頸部に刻目三角突帯、胴部に断面台形の刻目突帯を一条づつめぐらしている。器形から二重口縁壺の可能性もある。墓壙の規模は検出面で長軸約108cm、深さ23cmである。主軸はN-10°-Wで埋置角約9°である。時期は弥生時代後期後半～末である。

３号甕棺墓

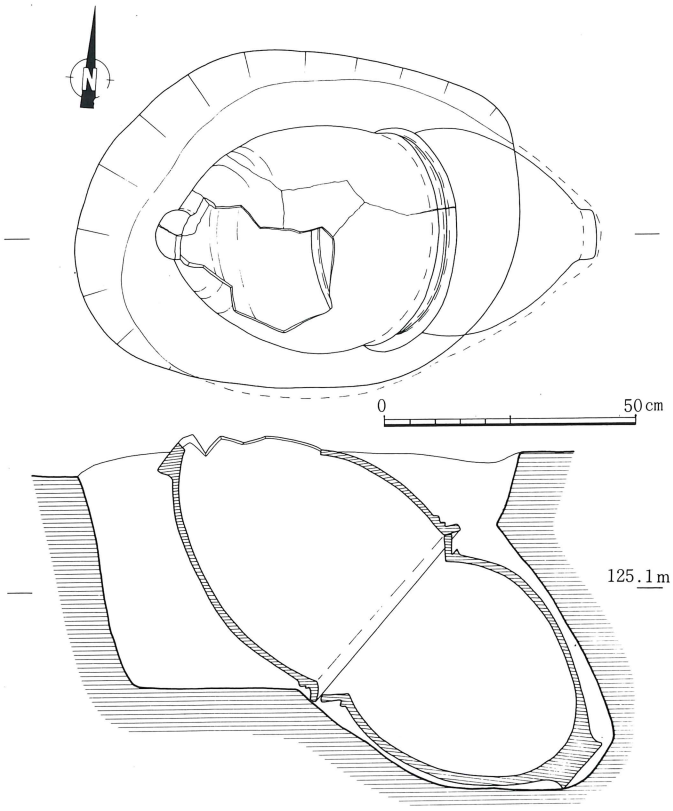
３号甕棺墓は合口で、墓壙は二段堀りで長軸98cm、短軸67cm、深さ70.5cmである。主軸はW-5°-S、埋置角は約40°である。上甕「く」の字口縁で口縁下部に二条の突帯がめぐる。下甕は「く」の字口縁で端部が跳上がり、口縁下部に一条の突帯がめぐる。上下甕とも底部は薄底でややレンズ状を呈している。弥生時代後期前半前後に比定される。（橋本）



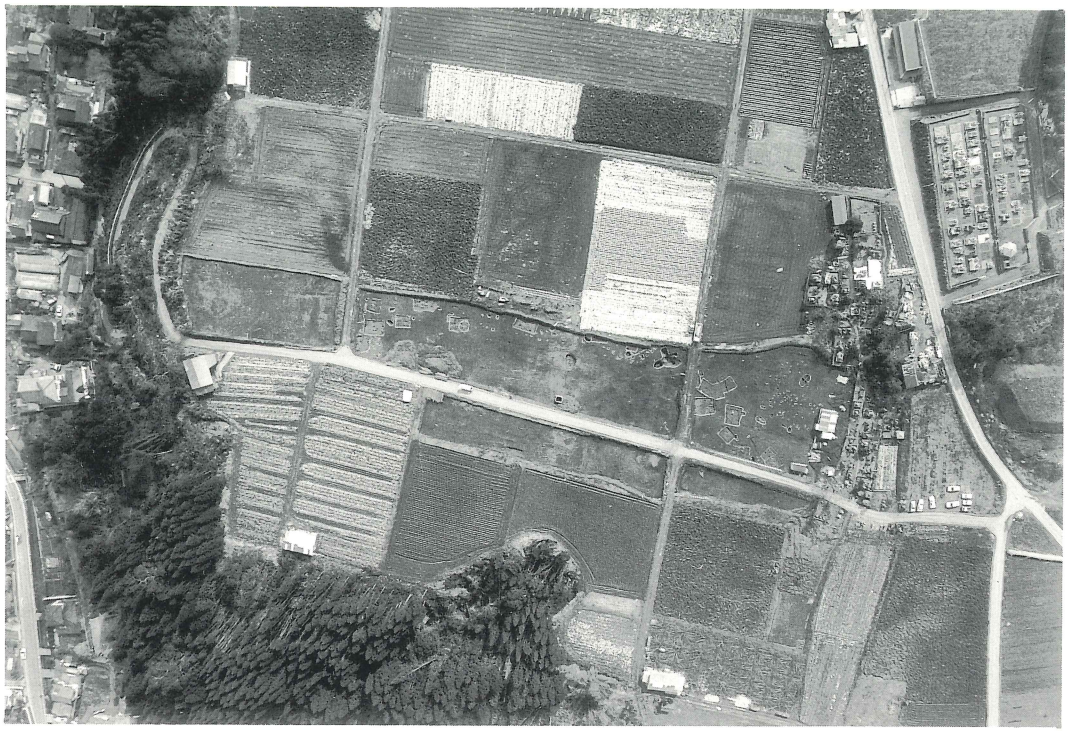
第７図　後迫遺跡１号土坑実測図



第８図　後迫遺跡２号甕棺墓実測図



第９図　後迫遺跡３号甕棺墓実測図



後迫遺跡全景（東から）

後迫遺跡８号住居跡（北から）

後迫遺跡２号甕棺墓（南から）

後迫遺跡３号甕棺墓（南から）

2．大迫遺跡

• 遺跡の所在地

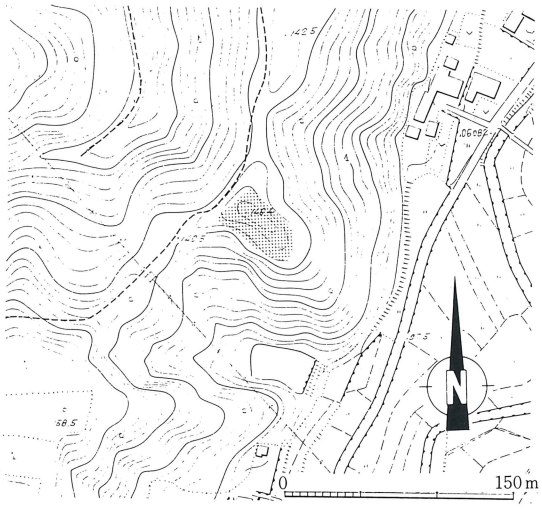
日田市大字有田字大迫

• 調査面積　900㎡

• 遺跡の概要

大迫遺跡は日田盆地をとり囲む低丘陵の北東部に位置し、その間を貫流する求々里川右岸の標高145mの舌状丘陵上に立地する。

調査区は、北東～南西間約50m、南北～南東間約20mの低丘陵頂部の平担地に位置する。丘陵の周囲は急峻な斜面となっており、低湿地との比高差は約40mを測る。峰続きの北側平坦部には中尾古墳群が存在することから、当古墳群との関係が考えられた。



第10図　大迫遺跡周辺地形図

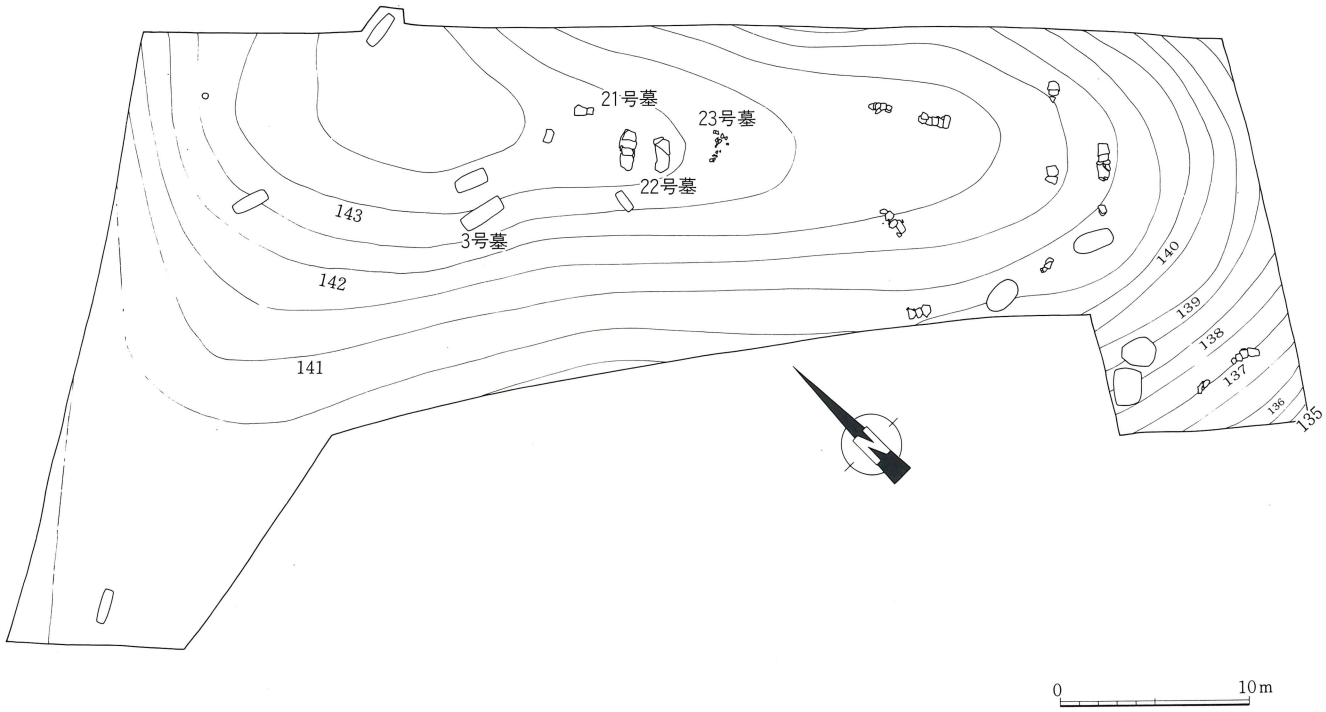
当遺跡は平成２年度に試掘調査を行った。本年度は試掘調査の結果をうけ、あらためて本調査を実施した結果、古墳時代の土壙墓・石蓋土壙墓・石棺の計24基を検出し調査した。当調査区は凝灰岩上に形成されており、石蓋の陥没、土壙側壁の崩落、さらには後世の削平を受けていて残りはあまり良くない。

土壙墓は８基を確認したが付近に棺材が散材していることから、このうちの数基は石蓋土壙墓であった可能性が高い。副葬品としては鉄鏃・小玉・土師器等が出土した。規模は、長辺１～２m前後、短辺0.5m前後の隅丸長方形を呈している。

石蓋土壙墓は15基を確認した。石蓋の石材は安山岩・凝灰岩の二種類を使用しており、それぞれ割石を数枚重ね合わせている土壙、両石とも使用している土壙、或いは１枚石の石蓋土壙墓も検出された。副葬品としては鉄鏃・土師器等が出土した。このうち２基から人骨が出土した。さらに15基のうち３基は0.5×0.3m前後の小児用であり、棺材は0.8m程の凝灰岩を１枚、或いは２枚使用して石蓋としている。副葬品は出土しなかった。

石棺は１基確認したが北側小口部分が残存しているだけであり、石蓋及び側石は存在しない。墓壙も削平を受けていて、残りは悪い。副葬品は鉄鏃・鉄剣等鉄器が多量に出土した。

今回の調査は低丘陵の南東向きに開けた地点を対象に行なったが、道路幅という限られた範囲であったため、丘陵全体の広がりは摑むことはできなかった。さらに約100m北側の平担地には２基の古墳が存在することより別の墓域の存在も十分考えられる。



第11図　大迫遺跡遺構配置図

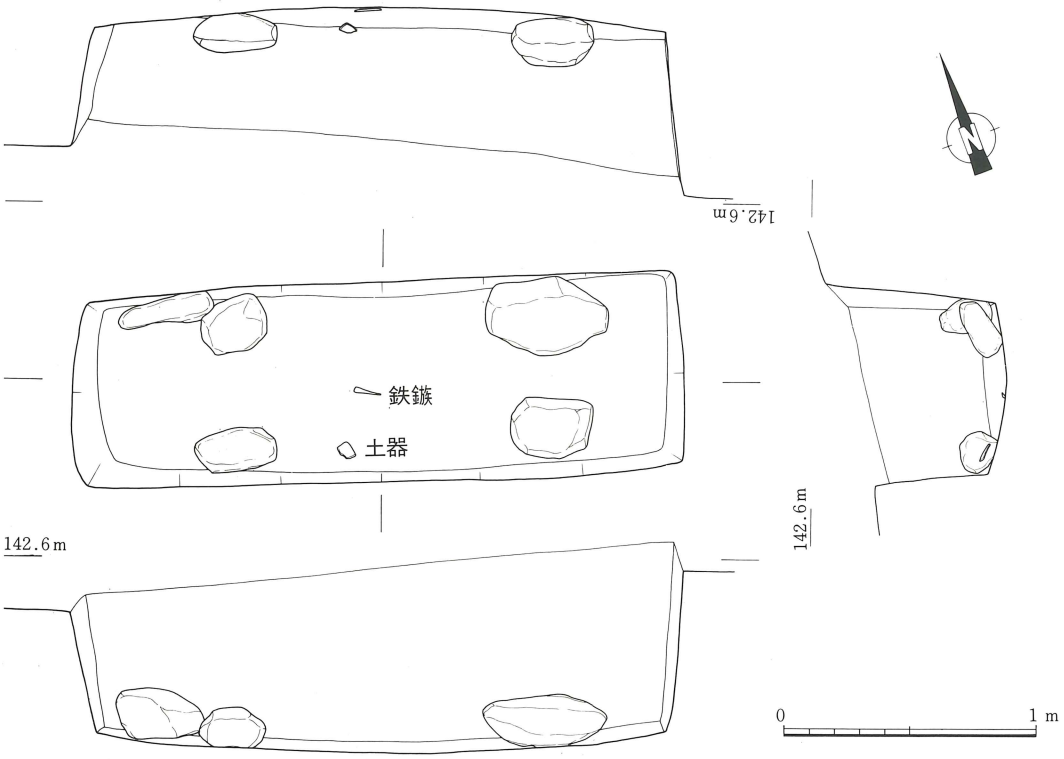
3号墓

調査区の中央やや西に位置する。標高は142.5m前後を測り、主軸をE-20°-Sにとる土壙墓である。墓壙は検出されなかった。土壙の規模は2.43×0.79×0.74m の長方形を呈している。内法は2.26×0.68m を測る。

土壙の残りは非常に良くほぼ原形を保っている。土壙の四隅に５個の河原石を据え床面より約0.2m程度浮かしている状況が認められた。土壙内は中央部分がやや窪んでいるが、ほぼ平担に整形されている。土壙内外での赤色顔料の使用は認められない。この土壙墓は石上に棺を埋置した木棺墓である可能性もある。

３号土壙は床面の幅も全体に等しく、高さもほぼ均一のため頭位の比定はできなかった。

副葬品は土壙中央付近から鉄鏃１点及び土器片１点が出土した。鉄鏃は床面直上で検出した。これは原位置を保っているとみられ、棺内副葬であった可能性が高い。土器片は流れ込み或いは棺外副葬の可能性が高い。



第12図　大迫遺跡３号墓実測図

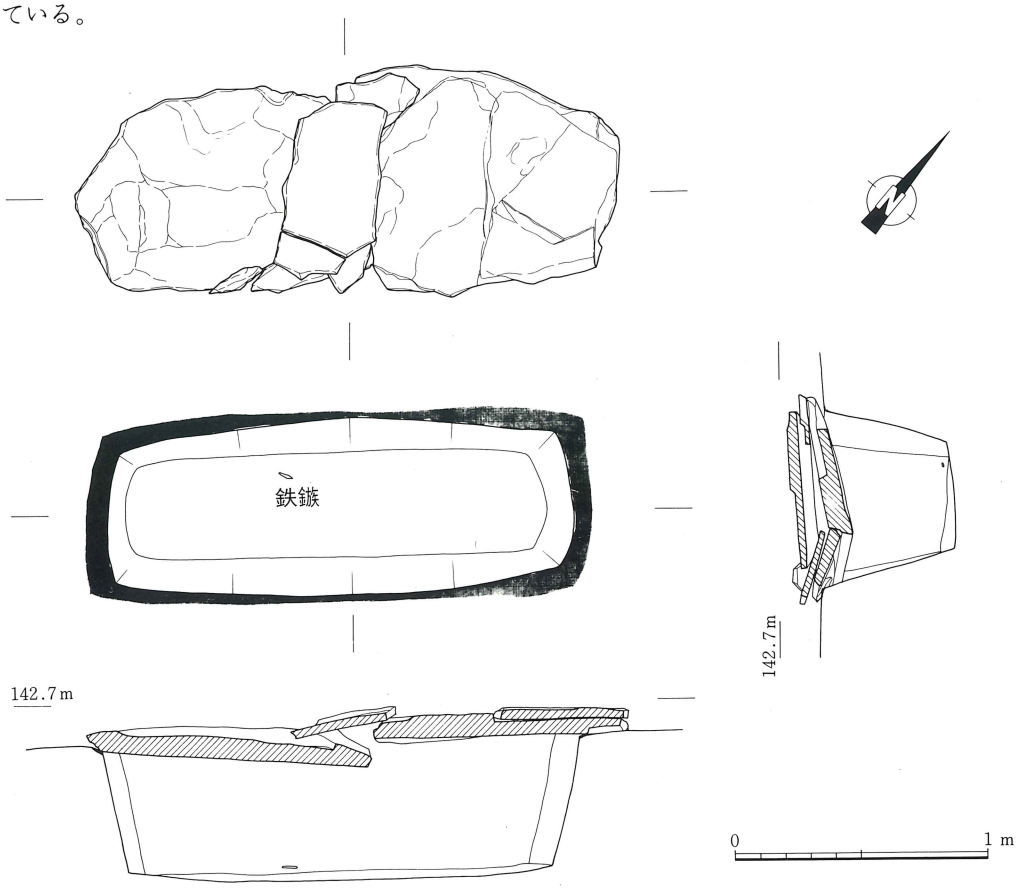
21号墓

調査区のほぼ中央に位置する。標高は142.7mを測り、主軸をN-50°-Eにとる石蓋土壙墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土壙の規模は1.87×0.71×0.55m の隅丸長方形を呈しており、内法は1.63×0.4mを測る。土壙の周囲には床面と石蓋間の隙間を補うよう粘土で厚さ3㎝程度の補填を行っている。

蓋石は面取りをした3枚の凝灰岩割石を使用しているが側壁の崩落のため中央部が若干落ち込んでいる。石蓋の形態は大型の蓋石2枚で土壙を覆い中央を小型の蓋石で補っている。
裏面は全面赤色顔料を塗布している。

土壙内は崩落が激しくほとんど原形を留めていないが、側壁及び床面には一部赤色顔料が残存していることから、赤色顔料は土壙全面に塗布されていたと考えられる。床面は、ほぼ平坦であり、枕に使用したと考えられる粘土や礫、或いは礫床等の施設は認められない。棺の形態から頭位は北東方向のものである。

副葬品は土壙中央北側壁付近から鉄鏃1点がほぼ床面直上で出土した。先端は頭位方向をむいている。



第13図　大迫遺跡21号墓実測図

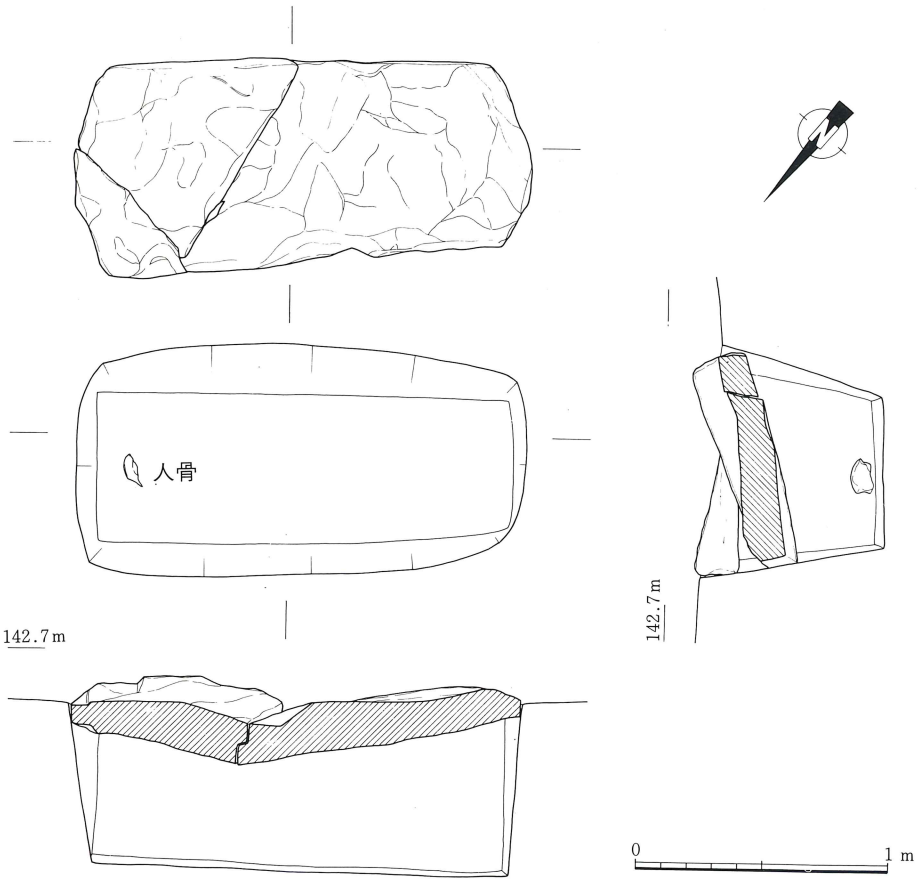
22号墓

調査区のほぼ中央、21号墓の北東１ｍの場所に並行して確認された。標高は14.6mを測り、主軸をN-50°-Eにとる石蓋土壙墓である。本来は二段掘り込みであったと思われる。土壙の規模は1.78×0.92×0.65m の隅丸長方形を呈しており、内法は1.65×0.58m の長方形である。

蓋石は面取りをした凝灰岩の１枚石を用いているが、北東側壁の崩落のため全体に土壙内に落ち込み、中央付近で破砕している。蓋石の規模は1.82×0.85×0.18m であり、裏面には全面に赤色顔料を塗布している。

土壙内は側壁上面の崩落が激しく土壙形成時の様相は残していないが、側壁及び床面の一部に赤色顔料が残存していることから、土壙全面に赤色顔料が塗布されていたと考えられる。床面は平坦であり北東側が高くつくられている。さらに北東先端より頭蓋骨が出土したことから頭位は北東方向のものである。床面は枕に使用したと考えられる粘土や礫或いは礫床等の施設は認められない。

副葬品は出土しなかったため時期は比定できない。



第14図　大迫遺跡22号墓実測図

23号墓

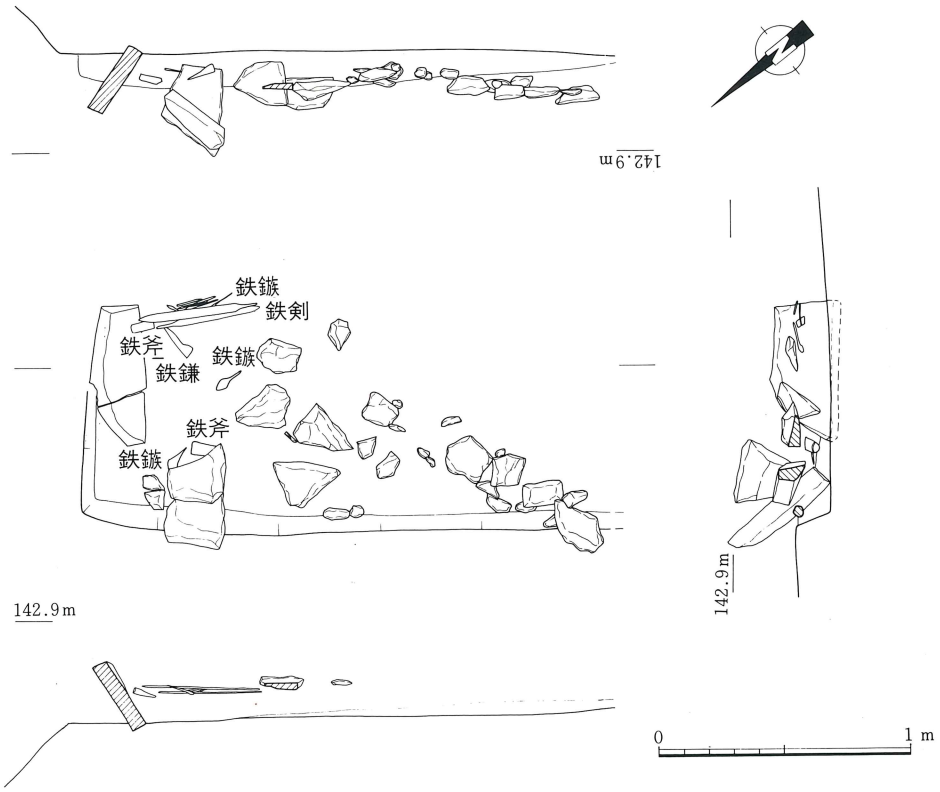
調査区のほぼ中央21・22号墓の北東に並行して確認された。標高は142.8mを測り、主軸をN－39°－Eにとる石棺である。しかし後世の削平により小口及び側石の一部分が残存するのみであり本来の形態は示していない。土壙内には側石の破片が散材している。残存部分の土壙最大値は1.9×0.95m、深さは北側壁付近で0.15m を測る。

土壙内には枕に使用したと考えられる粘土や礫或いは礫床等の施設は認められない。床面は平坦であり、標高は142.5m を測る。土壙内外での赤色顔料の使用は認められなかった。棺の形態からみて頭位は北東方向のものである。

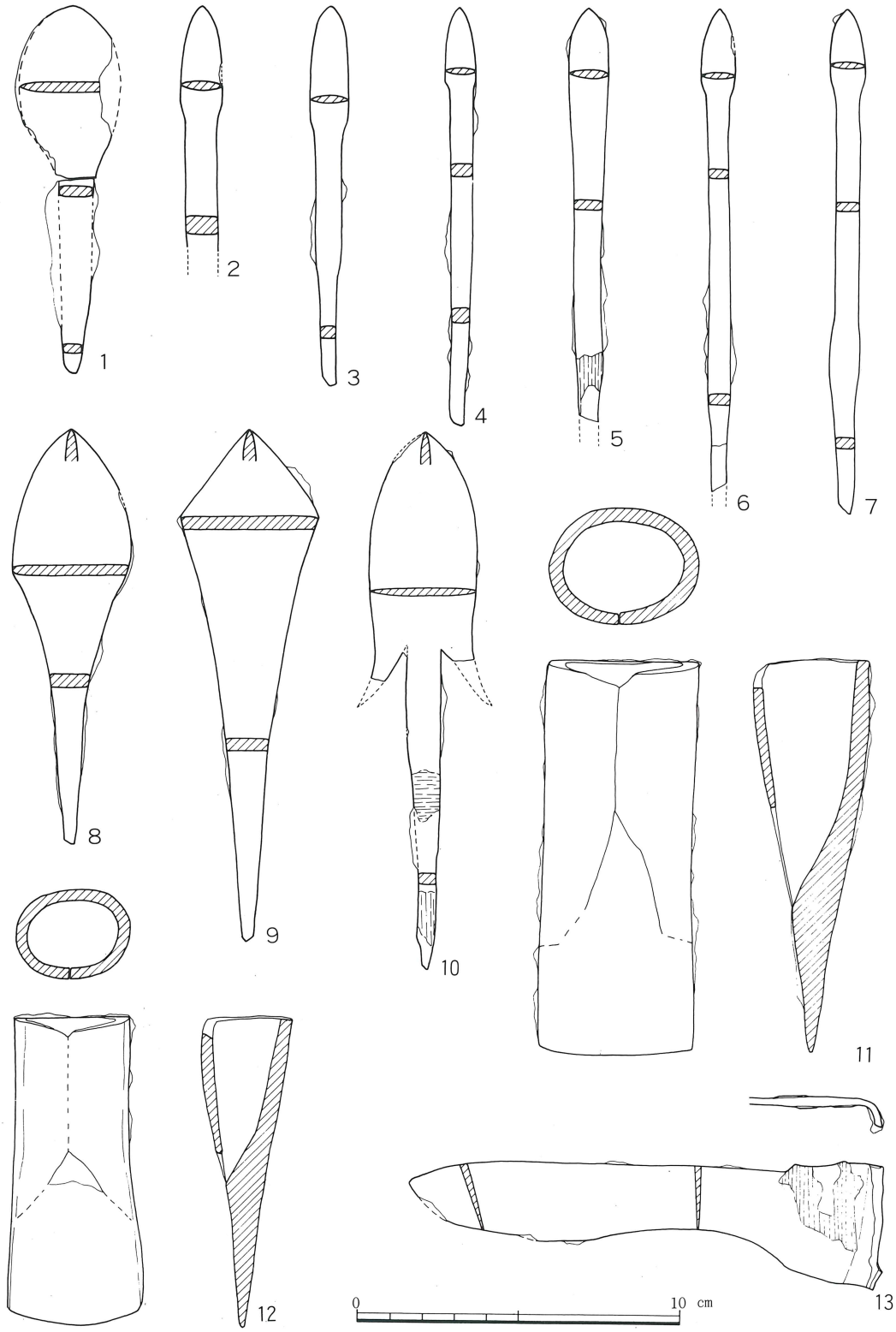
副葬品は北東小口壁寄りの東側壁ぎわから鉄剣２点、鉄鏃６点、鉄斧１点及び鉄鎌１点が、同じく北東小口壁から0.3m 中央寄りに鉄鏃１点が、さらに東小口壁より0.1m の北側壁ぎわから鉄鏃１点及び鉄斧１点がそれぞれ床面から0.1m 前後浮いた状態で検出された。

この石棺は、多数の副葬品を持ち、丘陵の中央部分に単独で存在することより古墳の可能性も考えられたため、周囲に周溝の存在を想定し確認作業を行ったが、削平により消滅したのか検出は無理であった。

出土遺物からみて、この石棺の時期は４世紀後半から５世紀前半のものであると考えられる。



第15図　大迫遺跡23号墓実測図

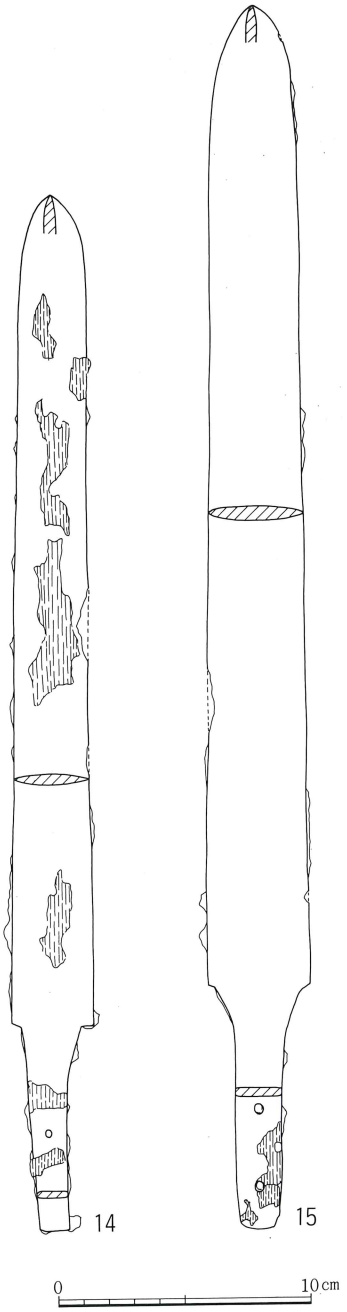


第16図　大迫遺跡３・21・23号墓出土鉄器実測図（１は３号墓出土、２は21号墓出土
３～13は23号墓出土）

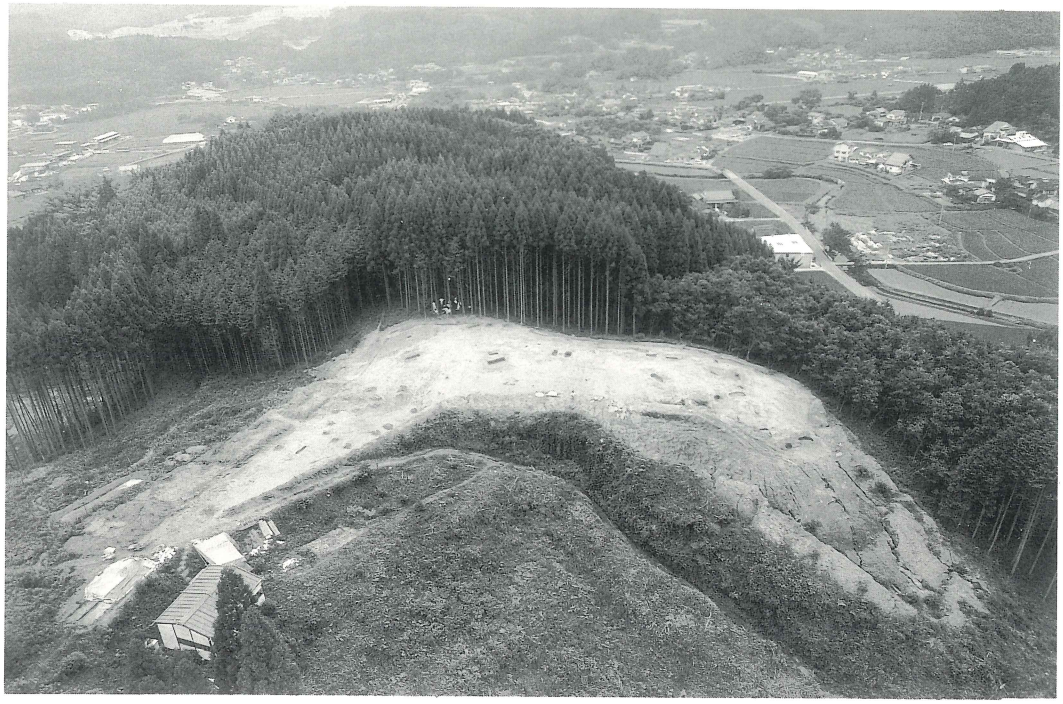
出土遺物（第16・17図）

1は3号墓出土の鉄鏃である。短頸無箆被両丸造柳葉式鏃で残存長11.3cm、身部長5.5cmであるが残りは悪い。2は21号墓出土の鉄鏃である。長頸両丸造鑿箭式鏃で茎を欠損する。残存長7.5cm、身部長3.5cm、身部幅1.3cmを測る。3～15は23号墓出土の鉄器である。3～7は長頸無箆被両丸造鑿箭式鏃である。3は全長11.6cm、身部長4cm、身幅1.1cm、4は全長12.8cm、身部長2.5cm、身幅1cm、5は身部長く、茎部の一部を欠損する。残存長12.7cm、身幅1.2cmを測る。茎部には桜皮巻痕が残る。6は茎部の一部を欠損する。残存長14.3cm、身部長2.7cm、身幅1.1cm、7は全長15.5cm、身部長2.8cm、身幅1.1cmを測る。8は短頸無箆被両丸造柳葉式鏃で全長12.8cm、身部長8cm、身幅3.6cm、身の厚さ3mmである。9は短頸無箆被柳葉式鏃である。全長15.7cm、身幅4.3cm、身の厚さ4mmとなる。10は短頸無箆被腸抉両丸造柳葉式鏃で全長16.5cm、身部8.4cm前後、身幅3.3cmで逆刺は欠損しているが、外へ開き箆被はない。茎部長は9.8cmで桜皮巻痕が残る。11は鍛造鉄斧である。袋部のつくりはよく、折り返し部は密着している。長さ12cm、刃部幅4.7cm、袋部内径3.6×2.8cmで長円形を呈する。12も鍛造鉄斧である。袋部のつくりはよく、折り返し部は密着している。長さ9.5cm、刃部幅4cm、袋部内径2.8×2.1cmで長円形を呈する。13は鉄鎌で全長14.7cm、刃部最大幅2.4cm、背厚さ3mmを測る。基部付近には柄木質が残存している。14は鉄剣である。全長40.8cm、身長32.7cm、身幅3cm、厚さ0.4cmを測る。関部は一方が直角をなし、他方は鈍角をなしている。茎部は身部の中心線より片側へ寄る。茎部中央に目釘穴1孔がみられる。身部には多くの鞘木質が残る。15も鉄剣である。全長48.2cm、身長38.5cm、身幅4cm、厚さ0.6cmを測る。茎部中央に目釘穴2孔がみられる。茎部には木質が残る。（友岡）

古野徳久「古墳時代鉄鏃の編年」『九州考古学』64　1989
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(1)「草場第二遺跡」
1989　大分県教育委員会
一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告書(1)
1989　大分県教育委員会



第17図　大迫遺跡23号墓出土鉄器実測図



大迫遺跡全景（南から）

大迫遺跡２・３号墓（西から）

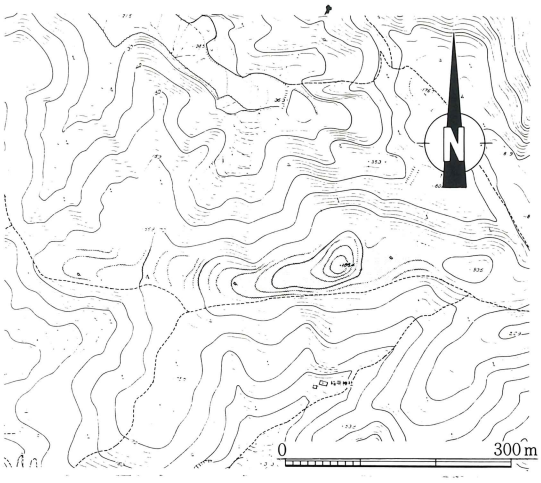
大迫遺跡21・22号墓検出状況（南東から）

大迫遺跡21・22号墓石蓋除去後（南東から）

大迫遺跡23号墓全景（南東から）

大迫遺跡23号墓鉄器出土状況（南東から）

3．有田横枕遺跡



第18図　有田横枕遺跡周辺地形図

• 遺跡の所在地

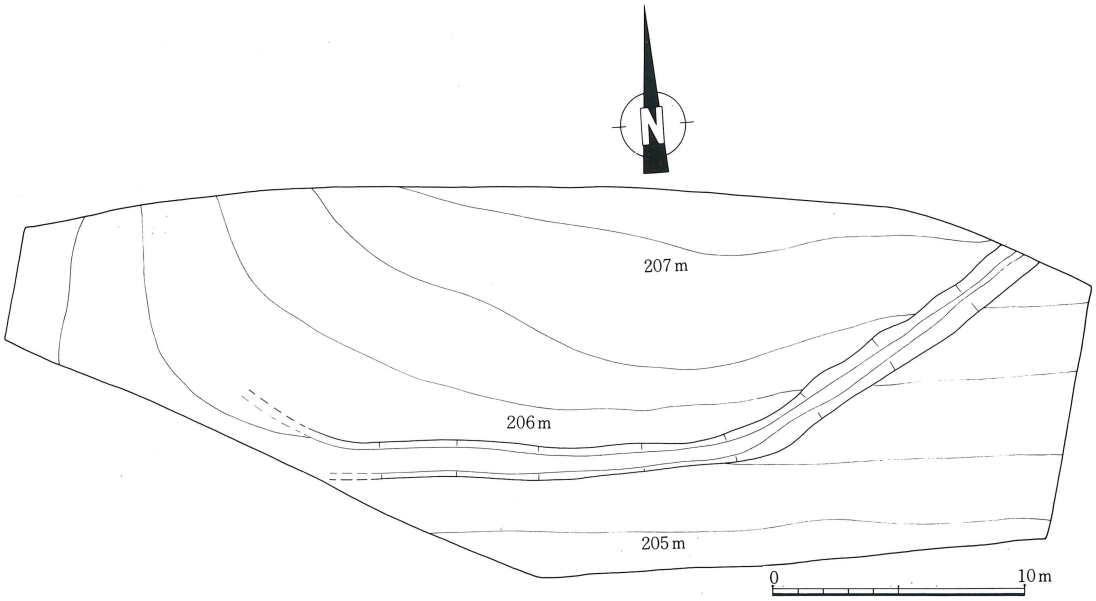
日田市大字有田字横枕

• 調査面積　　8,000㎡

• 遺跡の概要

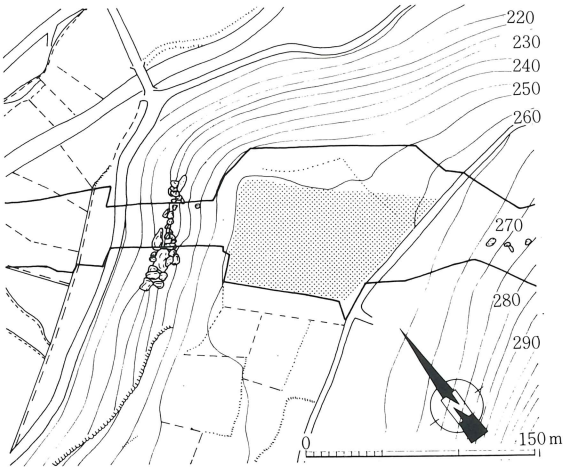
遺跡は日田盆地をとり囲む低丘陵の北東部、標高190mから210mに位置する。同丘陵上の北側に有田塚ヶ原古墳群が、また谷を挟んで南側には旧石器の散布地である松野原遺跡がある。当地区外の北側で住居跡と貯蔵穴が事前に認められており、更にその地形等から当初集落跡の可能性も考えられた。

調査は、まず重機を用いて調査区全面の表土剝ぎから行った。その結果ほぼ全面にわたって岩盤層が広がっており、調査区東端の北側部分から溝状遺構が一条検出されただけであった。溝状遺構の東側は調査区外に延びており、西側は削平をされているため、その全容は明らかではない。その規模は幅約1.5m、残存する深さは約0.15～0.3mである。なお時期については遺物が検出されなかったため不明である。（橋本）



第19図　有田横枕遺跡遺構配置図

4．七ッ枝遺跡



第20図　七ッ枝遺跡周辺地形図

• 遺跡の所在地

日田市大字東有田字七ッ枝

• 調査面積　6,000㎡

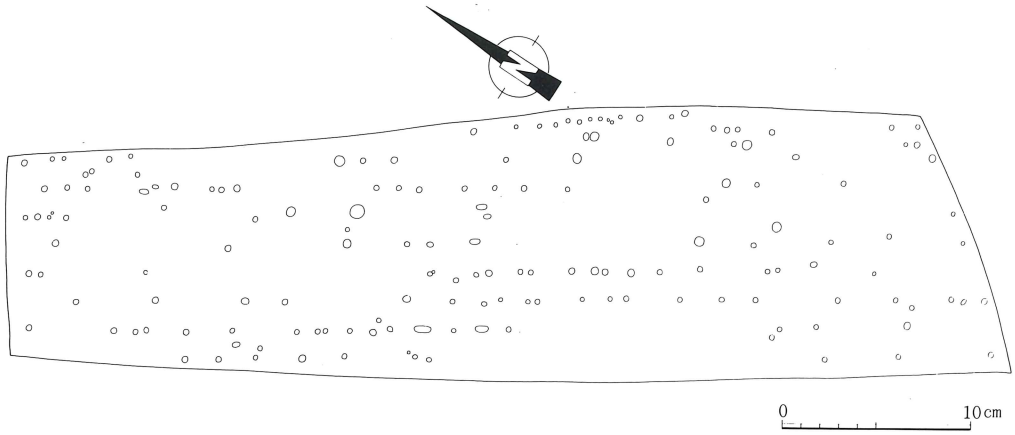
• 遺跡の概要

七ッ枝遺跡は、日田市東部の山間部、天瀬町に隣接する山岳の北側裾部、標高255m前後の舌状丘陵先端部に立地する。この丘陵は南北約80m、東西約400mの平担地で西～北側にかけては崖面となっており、眼下には月出山川の貫流する谷水田を望む。水田との比高差は約50mである。

調査区は3枚の段々畑であり、それぞれ比高差は約30cmを測る。重機で全面表土剥ぎを行った結果、南西の一番高い地点で遺構の検出があった。他の2地点では遺構は検出できなかった。検出遺構は柱穴群で当地点のほぼ全面から検出された。柱穴群からは堀立柱建物・柵列が確認された。しかし柱穴は直径30cm前後で深さは2～10cmと浅く、残りは非常に悪い。埋土には焼土・炭が詰まっており、おそらく焼失家屋であろう。この地域は戦後の畑地転換事業によりかなり土地の削平が行われたとみられ、農道とは1.5mの段差をもつ。このことから遺構の検出されなかった2地点も本来は遺構の存在した可能性が高い。

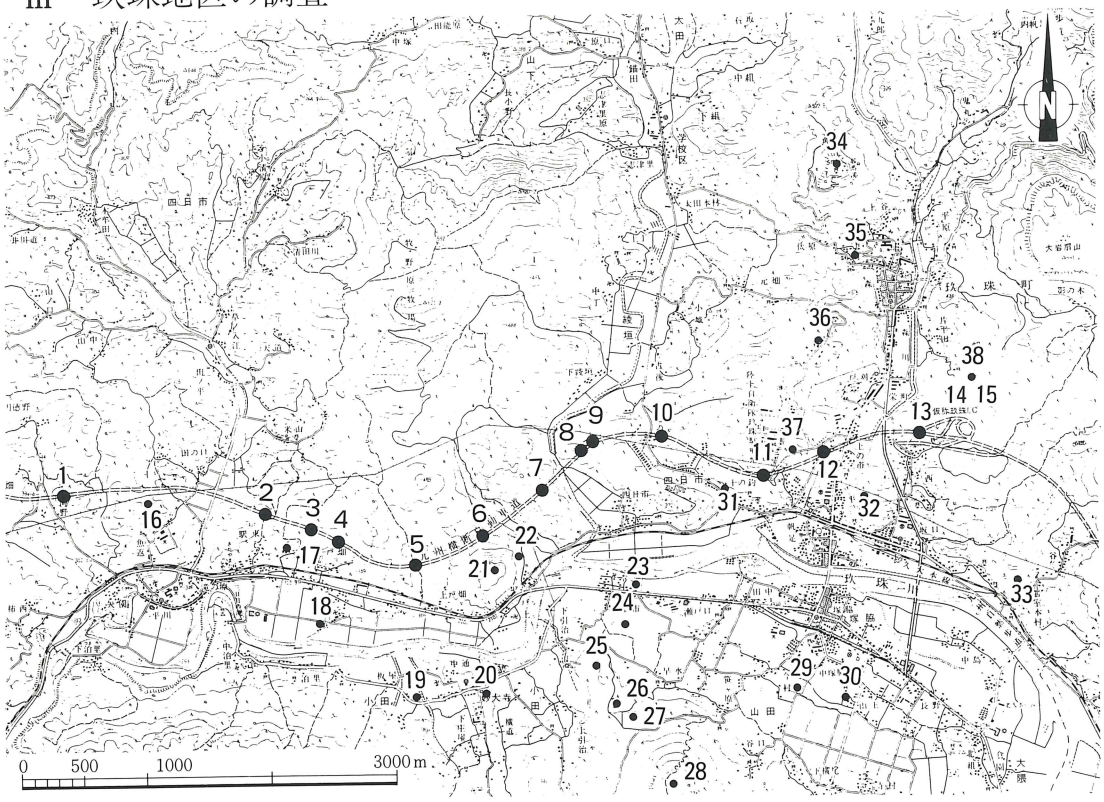
遺物は近世の陶磁器片が2点出土しただけでそれ以外は皆無であった。

明確な時期は不明であるが、近世以降のものであろうと思われる。（友岡）



第21図　七ッ枝遺跡遺構配置図

Ⅲ　玖珠地区の調査



第22図　玖珠地区遺跡分布図

1．小麦河野遺跡	**2．原田遺跡**	**3．岩塚古墳**	**4．宇西地区**
5．玖珠SA地区遺跡群	**6．谷ノ瀬遺跡**	**7．白岩遺跡**	**8．下綾垣横穴墓群A・B地区**
9．下綾垣遺跡	**10．池ノ原遺跡**	**11．上ノ原横穴墓群**	**12．治別当遺跡**
13．瀬戸古墳群	**14．瀬戸遺跡**	**15．帆足城跡**	16．魚返城跡
17．駅東横穴墓群	18．傾斜山古墳	19．小田遺跡群	20．鬼塚古墳
21．野田山城跡	22．野田山遺跡	23．山田遺跡	24．小竿遺跡
25．陣ヶ台将軍塚古墳	26．陣ヶ台彦塚古墳	27．陣ヶ台姫塚古墳	28．伐株山城跡
29．井ノ尻遺跡	30．山王古墳	31．十の釣遺跡	32．平台遺跡
33．岩室砦跡	34．角埋城跡	35．三島陣屋跡	36．千人塚古墳
37．鷹巣横穴墓群	38．鬼ヶ城古墳		

1．谷ノ瀬遺跡

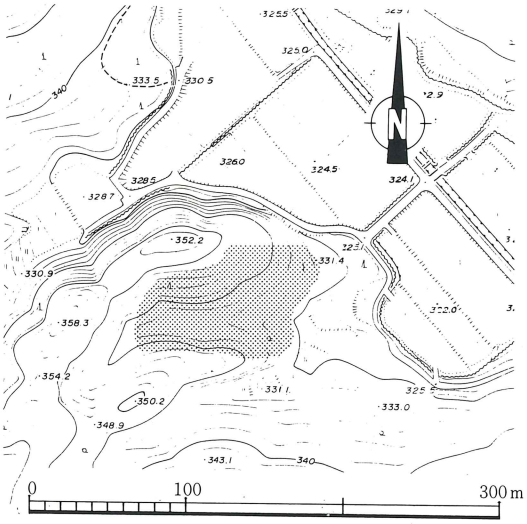
・遺跡の所在地

玖珠郡玖珠町大字戸畑字谷ノ瀬

・調査面積　5,400㎡

・調査の概要

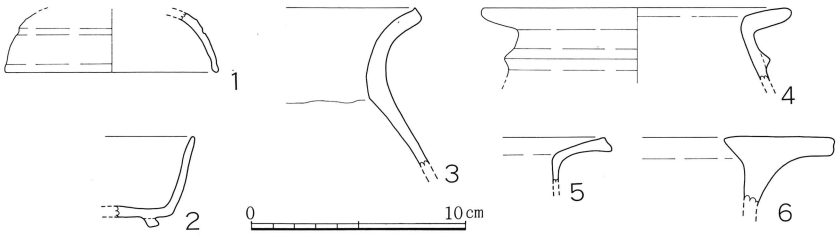
遺跡は玖珠盆地西部の通称野田山丘陵の北側斜面の谷部に位置し、浅い谷を挟んで南北にある。この野田山丘陵には山頂に中世山城が中腹には古墳時代の円墳・石棺群が存在する。



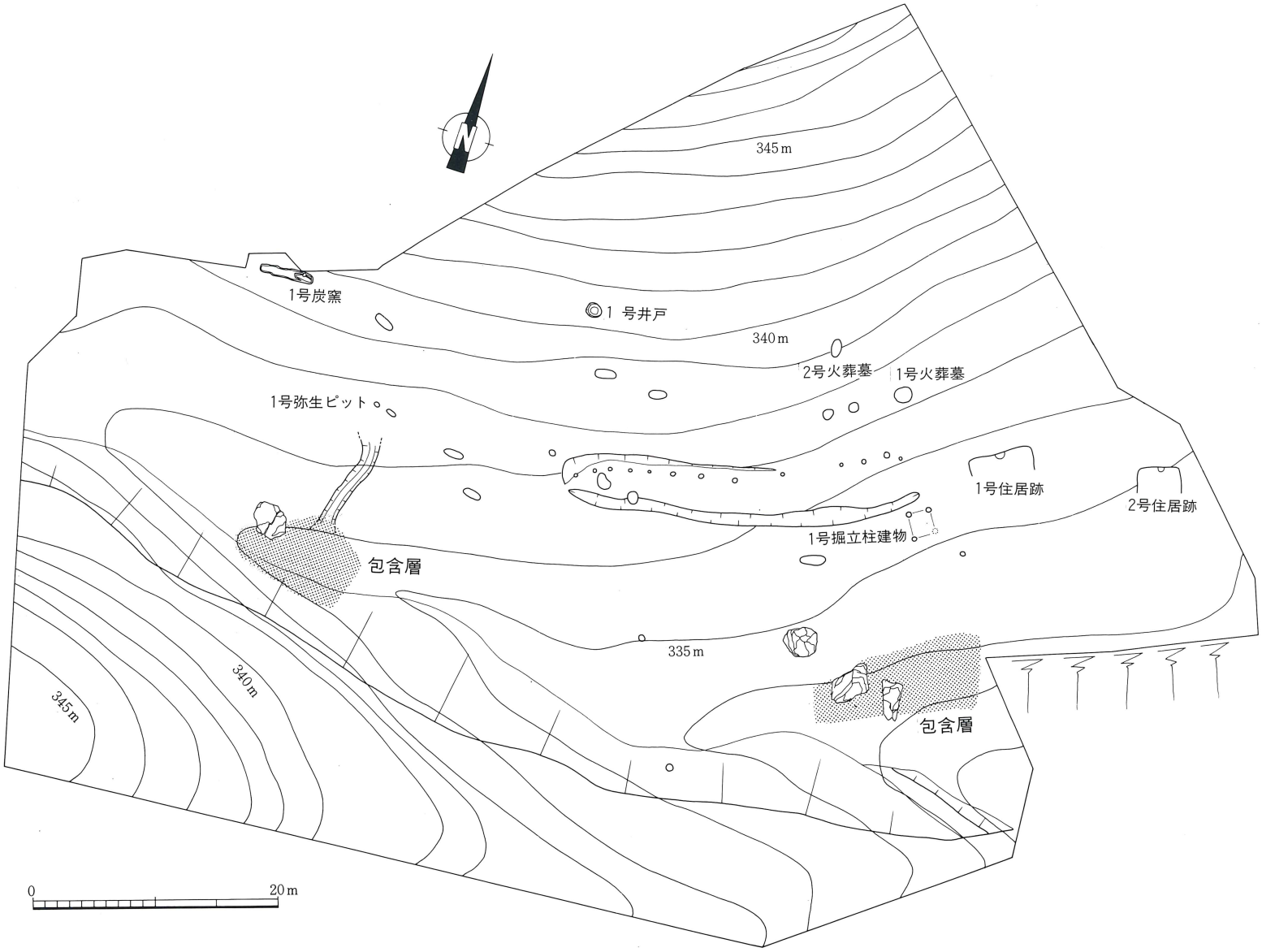
第23図　谷ノ瀬遺跡周辺地形図

調査は昨年の調査区の精査及び浅い谷を挟んで東西にのびる丘陵斜面部を行った。その結果、調査区西側の斜面下部で弥生時代中期中葉のピット及び包含層を上部で奈良末～平安初頭の炭窯を検出した。さらに東側の斜面下部で古墳時代後期（６Ｃ後半）の竪穴住居跡２棟と１×１間の掘立柱建物１棟を上部で時期不明の火葬墓２基をそれぞれ検出した。その他、斜面下位で時期不明の東西方向の溝状遺構と柵列群も検出した。

本遺跡で検出した遺構の内最も注目されるものは古墳時代後期の遺構群で、竪穴住居跡２棟と掘立柱建物１棟がセットでこの時期の集落の最小単位となるものであろうか。今後、この集団が寄ってたつ生産基盤を含めて検討課題となろう。（村上）

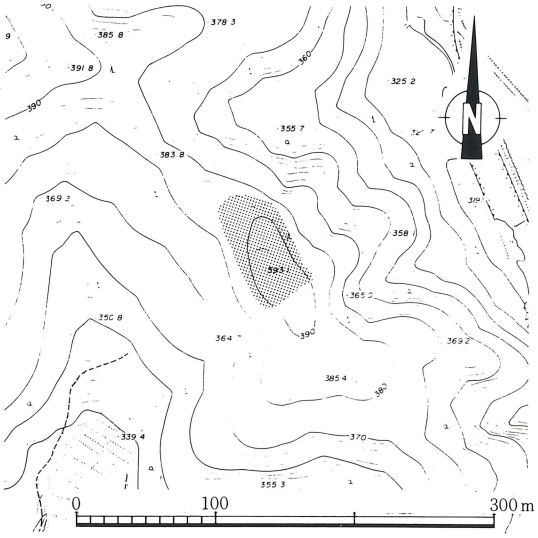


第24図　谷ノ瀬遺跡出土遺物実測図
（１・３は１号住出土、２は１号炭窯出土、４～６は１号弥生ピット出土）



第25図　谷ノ瀬遺跡遺構配置図

2．白岩遺跡



第26図　白岩遺跡周辺地形図

• 遺跡の所在地

玖珠郡玖珠町大字四日市字白岩

• 調査面積　3,000㎡

• 調査の概要

遺跡は玖珠町西部の玖珠川左岸、標高390mの山頂にある。

遺跡の立地する山頂は牧野原岳より南にのびる山岳の先端部で眼下に盆地を望む。盆地との比高差は約90mを測る。本遺跡の立地する山裾部には縄文早期～前期の遺跡がある。

調査は山頂平坦部を中心に行なった。その結束、山頂尾根裾部では全長約56m、深さ1～2m、幅1.5～3mの断面逆台形の環境を検出した。環濠東端は崖部分に落ち南側は発掘区域外の南方に延びている。濠の北側溝底より柱穴が確認された。

環濠埋土にはブロック状に焼土層や炭層が混入している。さらに最下層、中層、最上層の三層は黒褐色の風化土層であることから、この環濠は徐々に埋ったものと考えられる。また、埋土の状況から外側に土塁があったと推定される。

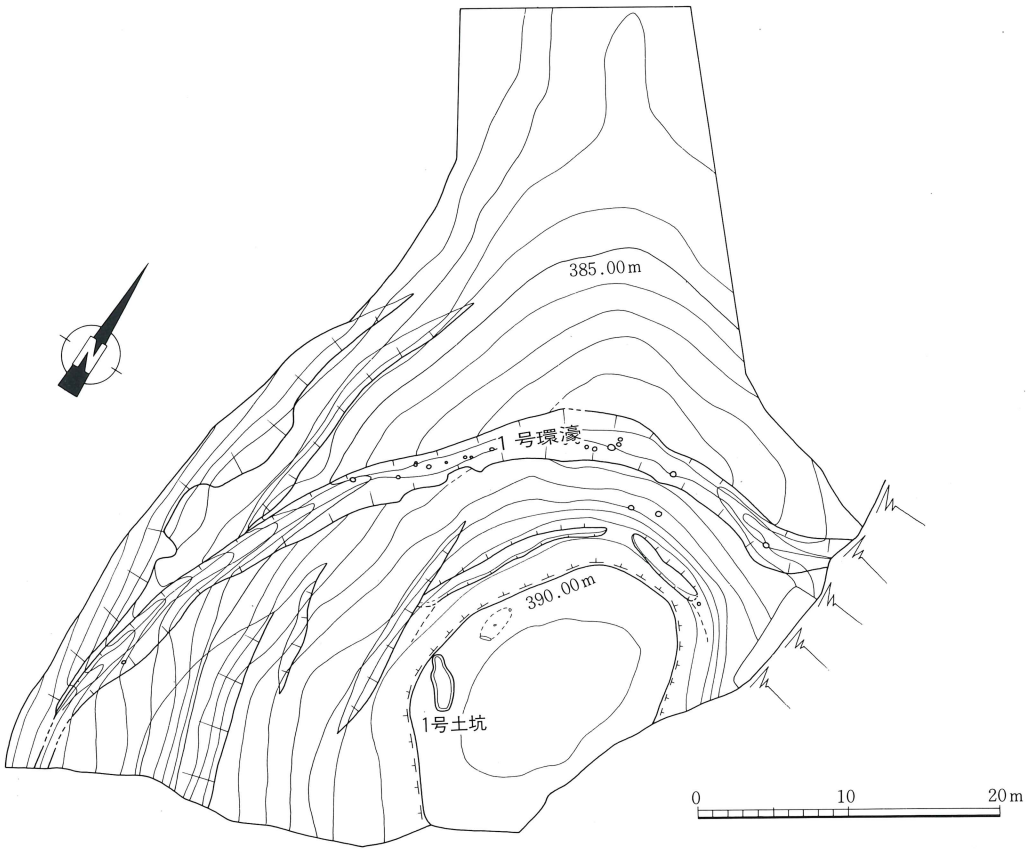
環濠内の尾根頂部は平坦に地山整形され、上面は長径20m、短径12mの範囲を平坦にカットしている。また、斜面部との境にも浅い溝を巡らす。この溝は北側で切られており、その斜面の下方で桂穴を検出したところから、この部分が入口の施設と考えられる。頂部平坦面西側斜面ぎわに長さ2.5m、最大幅1.0m、深さ0.4mの楕円形土坑(1号土坑)を検出した。

出土遺物は環濠内よりほぼ完形の壺形土器1点、底部片2点、磨製石鏃1点、拳大の河原石を再利用した石投弾200点以上が、1号土坑より壺口縁部と磨製石鏃の原石がそれぞれ出土した。

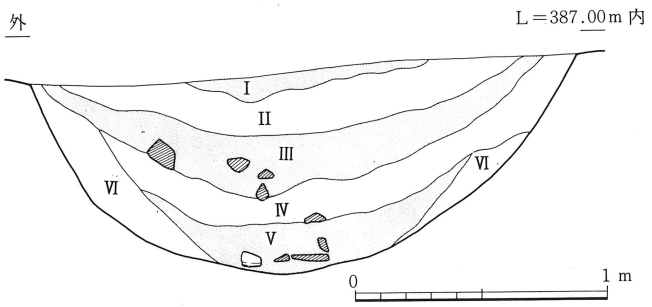
時期は弥生時代後期前半のもので遺跡の性格としては都出比呂志氏の弥生時代高地性集落カテゴリーAタイプに属し、九州島内における環濠をもつ高地性集落としては福岡県杷木町西ノ迫遺跡についで2例目のものである。

出土遺物（第29図1～5）

1は1号土坑出土の袋状口縁壺の口縁部である。復元口径8.0cmを測る。形態の特徴は口縁下端に稜を持つ袋状口縁をなす。頸部は短く胴部へと続く。調整は口縁部内外面ヨコナデ頸部外面は荒いハケ目後縦方向のケンマが、内面は指ナデが認められる。2は環濠南西部最下層中より出土した壺底部片である。底部径5.2cmを測る。形態の特徴は底部がわずかな上げ底状の平



第27図　白岩遺跡遺構配置図



Ⅰ層……黒かっ色粘質土、ハード、革、木根を多く含む。同化が著しい。
Ⅱ層……暗茶褐色粘質土、極くハード、風化がやや進む。
} 乾燥するとクラックになる。
Ⅲ層……黒色粘質土、粘質性強くハード、風化が著しい。河川礫や土器を包含する。
Ⅳ層……暗褐色粘質土、ハード風化が進んでいる。炭・焼土を包含する。丘陵部側より堆積する。
Ⅴ層……Ⅲ層と同じ。
Ⅵ層……暗黄褐色粘質土、極くハード、風化が若干認められる。平坦地側からの流入土（土塁埋土）
Ⅶ層……黄褐色粘質土、ハード風化はほとんど認められない。丘陵側より堆積する。

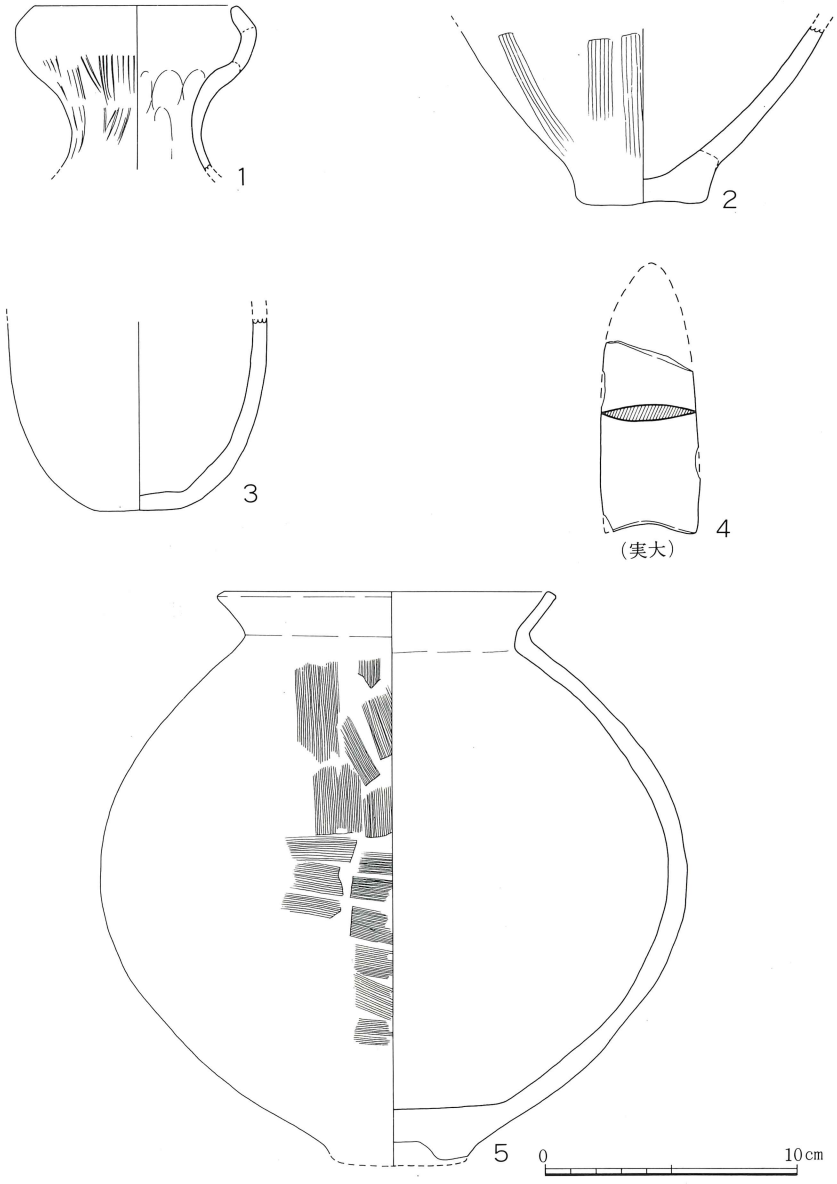
第28図　白岩遺跡１号環濠土層図

底を呈している。調整は外面が荒いハケ目、内面はナデである。３は環濠北東部土器溜りより出土した甕底部～胴部片である。形態の特徴は底部がややレンズ状を呈している。調整は内外面とも剥離が激しく不明である。４は結晶片岩系の磨製石鏃である。鋒は破損しており、残存長2.5㎝、幅1.3㎝を測る。基部はゆるやかに抉り込まれている。５は環濠北東部土器溜りより出土した壺である。底部の一部を欠損するがほぼ完形の土器である。口径13.5㎝、残存器高22.5㎝を測る。形態の特徴は口縁部が「く」字状に屈曲し、端部は方形を呈す。胴部は丸く最大径は中央になる。底部は一部分が欠損するが、やや丸味を帯びた平底を呈すと考えられる。調整は口縁部内外面が丁寧なヨコナデ、胴部上半外面は細かな縦ハケ目、中央～下半にかけては細かな斜め方向のハケ目、下半はナデを施している。

白岩遺跡１号周溝遠景

以上が本遺跡より出土した遺物の図示可能なものである。遺跡の性格によるものであろうかが土器類の出土が少ないのが特徴である。

時期については北部九州の編年を参考にすると福岡市比恵遺跡群第17次調査地点SE－02の一括遺物に類似するところから、弥生後期前半から中頃と考えられよう。（村上）



第29図　白岩遺跡出土遺物実測図（1は1号土坑出土、2～5は1号環濠出土）

3．下綾垣横穴群Ａ・Ｂ地区

• 遺跡の所在地

玖珠郡玖珠町大字綾垣字下綾垣

• 調査面積　5,600㎡

• 調査の概要

下綾垣横穴群Ａ・Ｂ地区は後述する下綾垣遺跡の南西側隣、丘綾急斜面及びその上方平坦部の標高342ｍ～374ｍに位置する。

下綾垣横穴群Ａ地区は横穴墓の存在が考えられたため試掘調査を実施した。

調査は斜面中央に土層観察の為のベルトを残しながら表土除去作業を行なった。土層堆積状況は表土層(腐植土10cm～50cm)～茶褐色土(礫を多量に含む基盤層)の順に堆積していた。

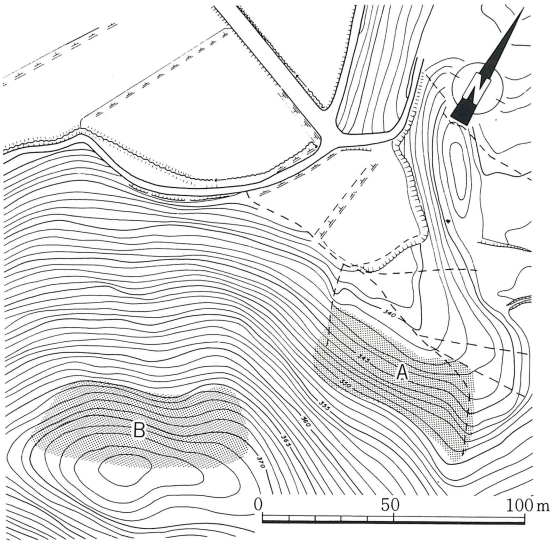
調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

Ｂ地区は頂部が平坦地であるため竪穴等の遺構の存在が考えられたため調査を実施した。

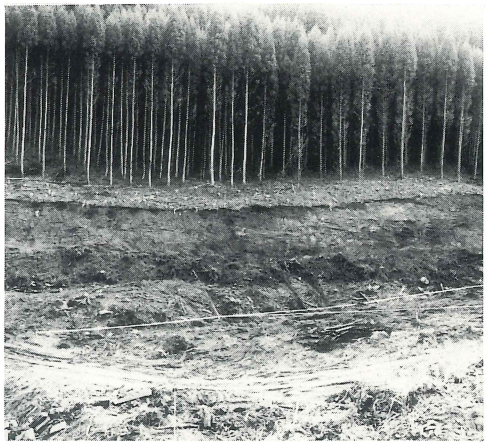
調査は表土除去作業後、遺構確認作業を行なった。土層堆積状況は表土層（腐植土30cm～50cm）～暗黄褐色粘質土（大礫を多量に含む基盤層）の順に堆積していた。

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

（染矢）



第30図　下綾垣横穴群Ａ・Ｂ地区周辺地形図



下綾垣横穴群Ａ地区全景

下綾垣横穴群Ｂ地区全景

4．下綾垣遺跡

・遺跡の所在地

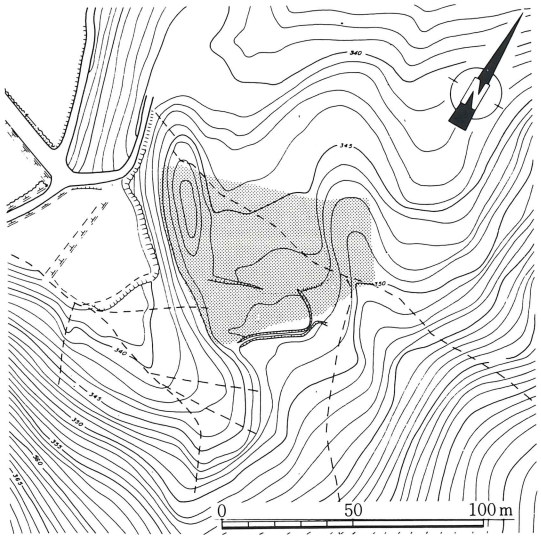
玖珠郡玖珠町大字綾垣字下綾垣

・調査面積　4,000㎡

・調査の概要

下綾垣遺跡は玖珠町西部に所在、太田川東岸の丘陵がつくりだす谷部平坦地標高約345mに位置する。

遺跡の位置する平坦地は南北約100m、東西約50m、北面を除く三方を大小丘陵に囲まれ北西に向かって緩やかに太田川氾濫域へと落ち込んでゆく。太田川との比高差は30m程である。



第31図　下綾垣遺跡周辺地形図

前年度調査は表土除去作業を実施、溝状遺構、竪穴住居跡、柱穴群等を検出した。これをうけ、本年度調査を継続した結果、古墳時代の竪穴住居跡18棟及び掘立柱建物跡７棟、土壙墓２基、土坑３基、竪穴１基、陥穴１基、柱穴200穴余り、溝状遺構１条、自然滝路１条、奈良末から平安時代にかけての墳墓１基、縄文から中世にわたる包含層を確認した。

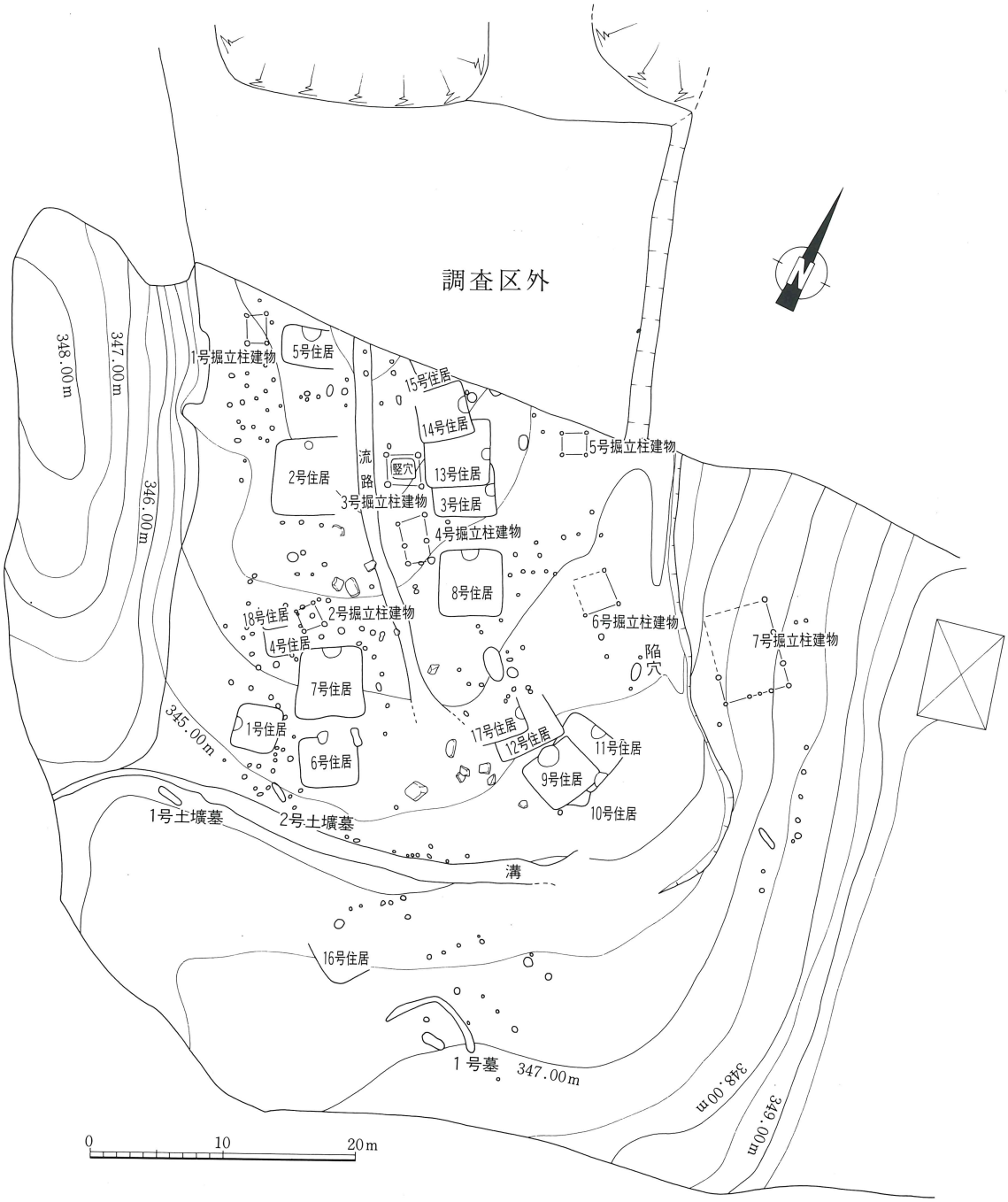
竪穴住居跡は17棟が大溝より北側に集中しさらに流路によって、東西に居住域を分けている。住居跡は削平・消失が著しいため、全体的に保存状態は悪く壁面の大半を失っているものもある。竪穴の平面形は方形で12棟の竪穴住居跡から南側を除く三方にそれぞれカマドを確認した。

これら住居跡の配置をみると大きく四つのグループに分けられる。流路東側に位置する３・13・14号住居跡、９・10・11・12・17号住居跡の２グループは、同位置に建て替えがなされているところから一定の集団によって意識的な占有がなされていたと思われる。流路西側に位置する１・６・７号住居跡、２・５号住居跡の２グループは、東側２グループに比べ集中度は欠くものの流路を意識した配置がみられる。住居跡規模も２・７号住居跡の様に大形のものが存在している。

このうち５号住居跡は明確な主柱穴をもたない３×４ｍの長方形小規模なもので北側にカマドを有する。この住居跡には豊富な遺物が残されており、壺・甕・甑・坏・鉄鎌・鞍金具等が出土した。

大溝南側に確認された墳墓は孤状の溝を有し、主体部より土師器６点を出土した。

今回の調査で６世紀後半を中心とする住居跡の存在を確認したが、調査区は平坦地の６割程度でしかなく北側調査区外に遺構の存在する可能性が高い。住居のグルーピング等検討を要する内容を含んでいるといえよう。



第32図　下綾垣遺跡遺構配置図

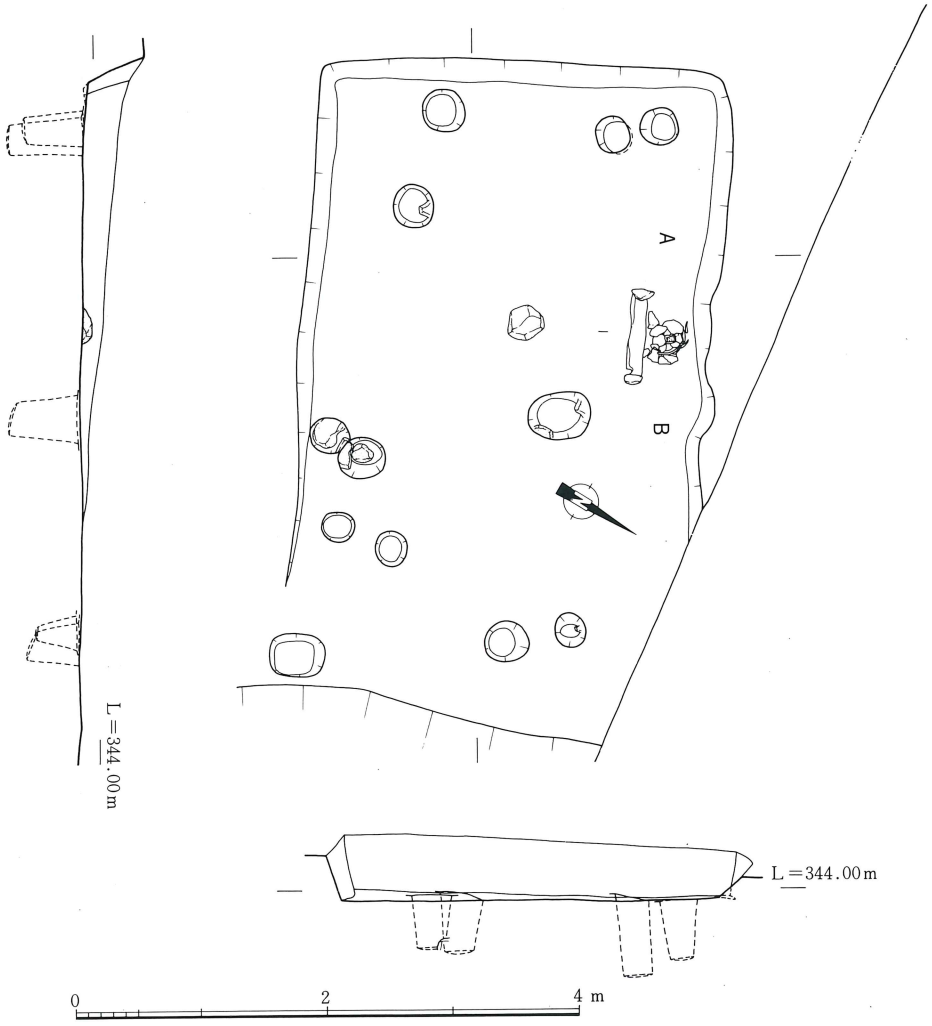
5号住居跡

5号住居跡は調査区東側隅に位置し西側を小丘、東側を流路に囲まれている。住居跡からは多数の遺物が出土し北側壁面中央には、カマド施設を有している。

住居プランは長方形を呈しており3.3m×4.2m、主軸はN－18°－Wを測る。主柱穴は認められず不規則に柱穴8穴を確認した。

カマド

焚口部分には左右袖石及び天井石が残されており、左袖石は砂岩質の河原石を右袖石は円柱状に整形した泥岩を使用していた。袖石はともに旧状をよくとどめておりほぼ直立した状態で検出した。袖石の下面は7cm程の掘り方を施していた。天井石は泥岩を方柱状に手を加えて用いており、袖石間に落ち込んでいた。長さは58cmを測り、袖石間と同じ大きさであった。



第33図　下綾垣遺跡5号住居跡実測図

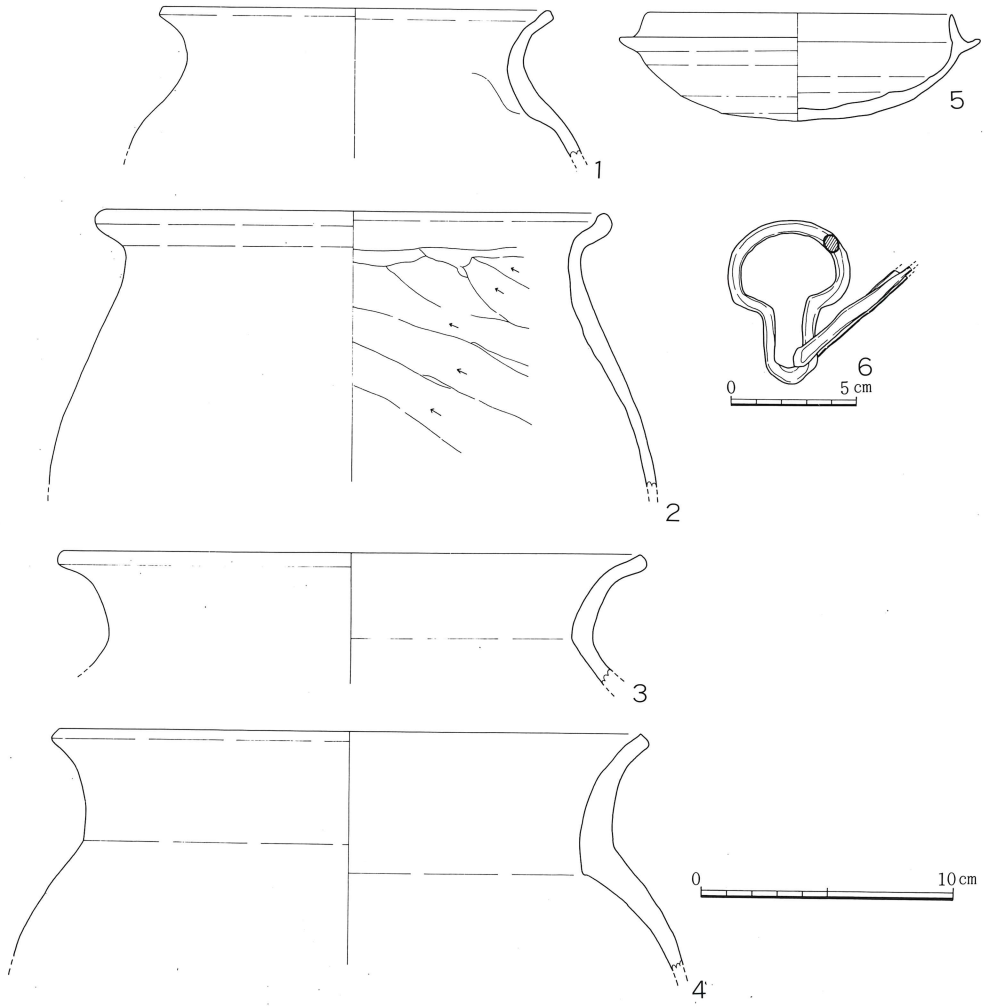
燃焼部は全長約25cmを測り、上部構造は崩落・消失していた。燃焼部後方には方柱状高さ18cmに作り出した泥岩の支脚を床面に6cm程掘り込み配置していた。支脚上には甕が据え付けられた状態で出土しておりカマド使用時の遺物と考えられる。燃焼部中央は被熱しており赤褐色に変化している。

煙口部は形状を良くとどめており直径5cm程の規模を持つ。

煙道部は住居跡外側へ延び全長40cmを測る。

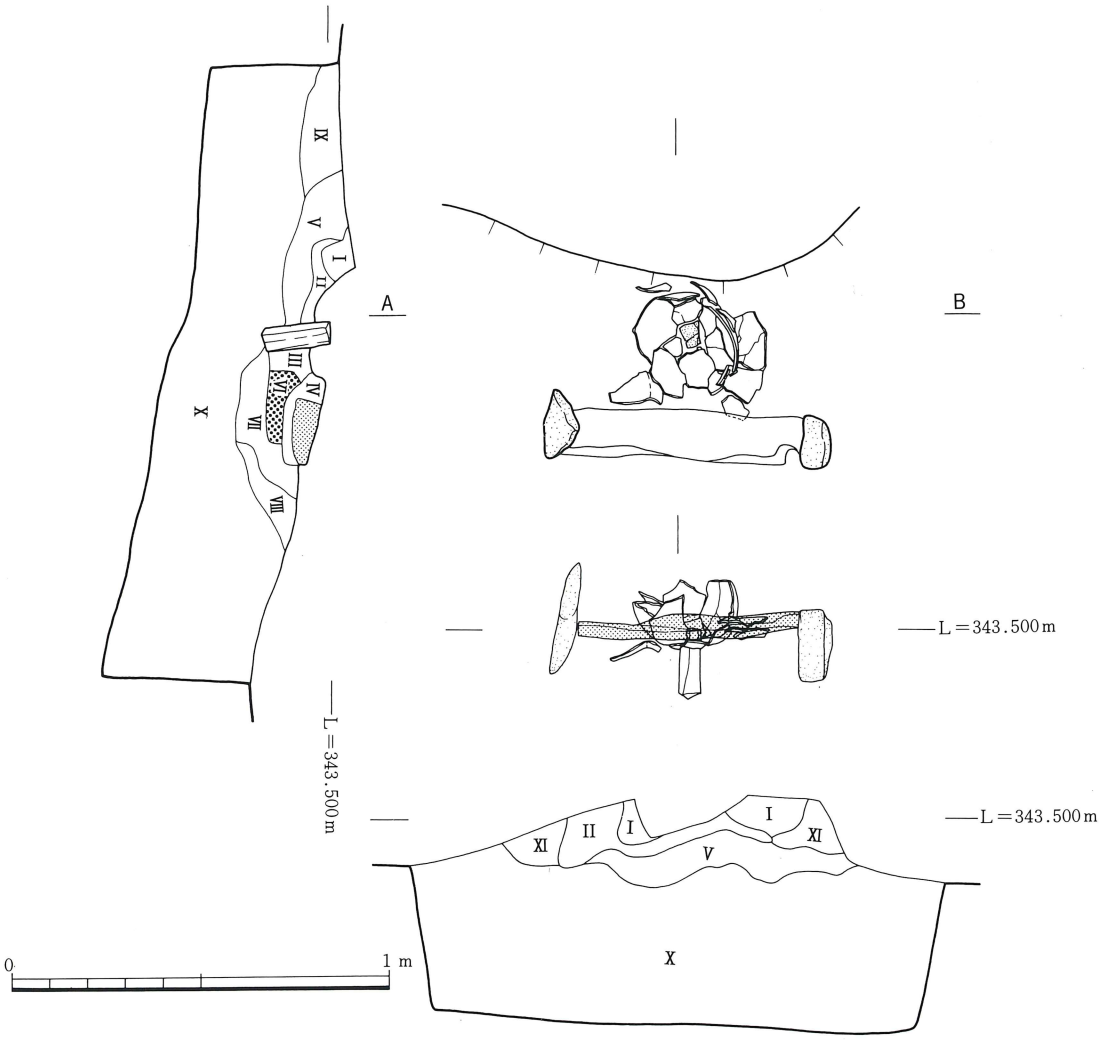
出土遺物（第34図1～6）

5号住居跡からは多数の遺物が出土した。特にカマドを中心にして、壺・甕・鞍金具・坏等が出土したが完形品は少ない。また中央部からは鉄鎌・鞍金具が出土した。1は甕でカマド焚口部附近より2cm程浮いた状態で出土、2は甕でカマド施設内より出土、三片に破かれ4を固定するかたちで確認された。3は甕でカマド焚口部附近から2cm程浮いた状態で出土。4は支脚



第34図　下綾垣遺跡5号住居跡出土遺物実測図

上に据え付けられていた甕である。5は住居跡西南隅の床面直上から、6は鞍金具で住居中央の床面から7cm程浮いた状態で出土した。これらの遺物から5号住居跡は6世紀後半に営まれていたと考えられる。（染矢）



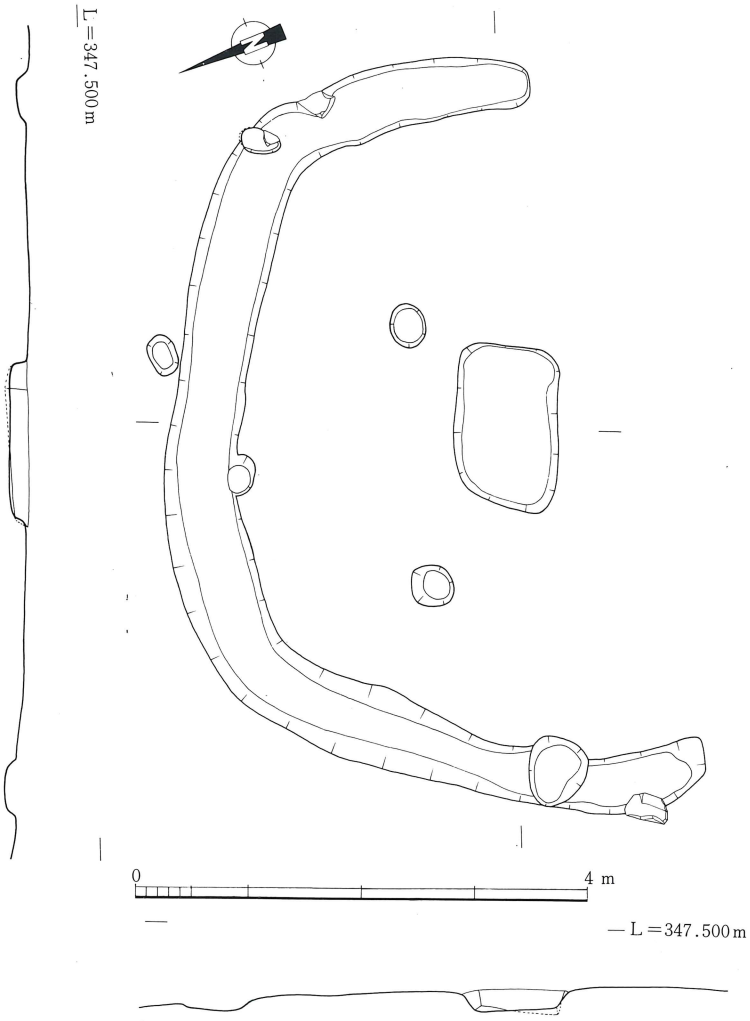
Ⅰ層……茶褐色土、小礫を含むが焼土ブロックは含まず。
Ⅱ層……暗茶褐色土、小礫・焼土ブロックを含む。
Ⅲ層……暗赤褐色土、焼土ブロック・炭化物を含む。
Ⅳ層……黒褐色土、　　〃　　。
Ⅴ層……暗黒褐色土・焼土ブロックは含まず炭化物を含む。
Ⅵ層……赤褐色土、燃焼部と推定、被熱し、凝固している。
Ⅶ層……暗茶褐色土、Ⅱ層より暗く焼土粒を含む掘り方とⅥ層との漸位的位置。
Ⅷ層……暗茶褐色土、Ⅶ層と同じ暗さ、焼土粒は含まず。
Ⅸ層……黒褐色土、Ⅳ層に似るが、焼土・炭化物を含まず。
Ⅹ層……明茶褐土、小礫を含む。
Ⅺ層……暗茶褐色粘質土、カマド使用時の粘土と考えられる。小礫・炭化物・焼土ブロックを含む。粘土量は少ない。

第35図　下綾垣遺跡5号住居跡カマド実測図

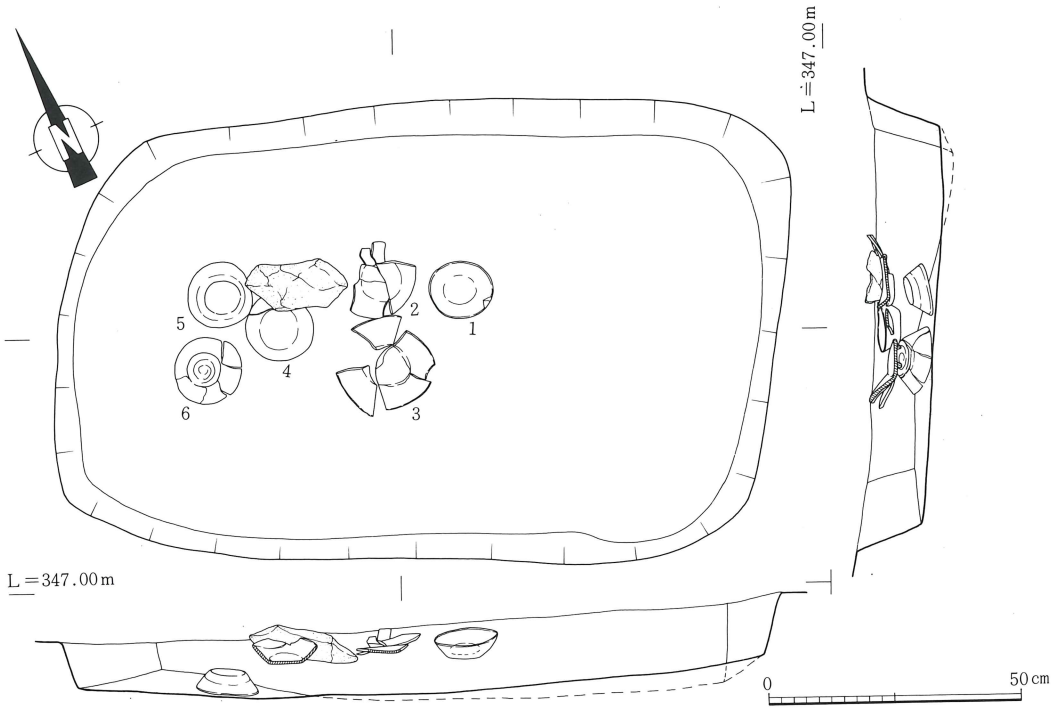
1号墓

1号墓は調査区南側の緩やかな傾斜地上で検出された。規模形状は東西約7m、南北約4.6m、幅約0.45～0.65m、最深部約0.2mの孤状を呈する溝を検出した。この溝は検出されたままの形状で築かれたのか、削平されこの形状となったのかは判然としない。主体部は約1.3×0.9mのほぼ長方形を呈す土壙墓である。主体部の深さは約0.09～0.2mである。

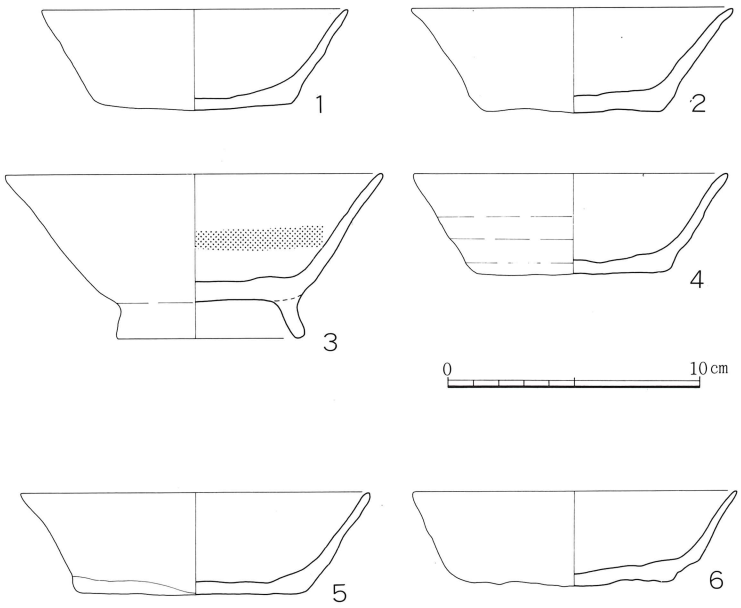
遺物は主体部よりほぼ完形の土師器が6点出土した。これは底部をヘラ切りの後ナデ調整した坏5点と高台付埦1点である。このうち、坏2点は主体部床面直上にふせた状態で出土しており、棺内副葬と思われる。他の4点は見込みを上向きに主体部床面より浮いて出土しており、棺外祭祀に供されたものと考えられる。これらの土師器を含む主体部の埋土は小礫・地山粘土質・カーボン粒を含む黒褐色土であった。但し、伏せた坏内の埋土は明茶褐色を呈していた。なお、これらの土師器はその形態及び技法から9世紀中頃を中心とした時期の所産と思われる。(須原)



第36図　下綾垣遺跡1号墓実測図

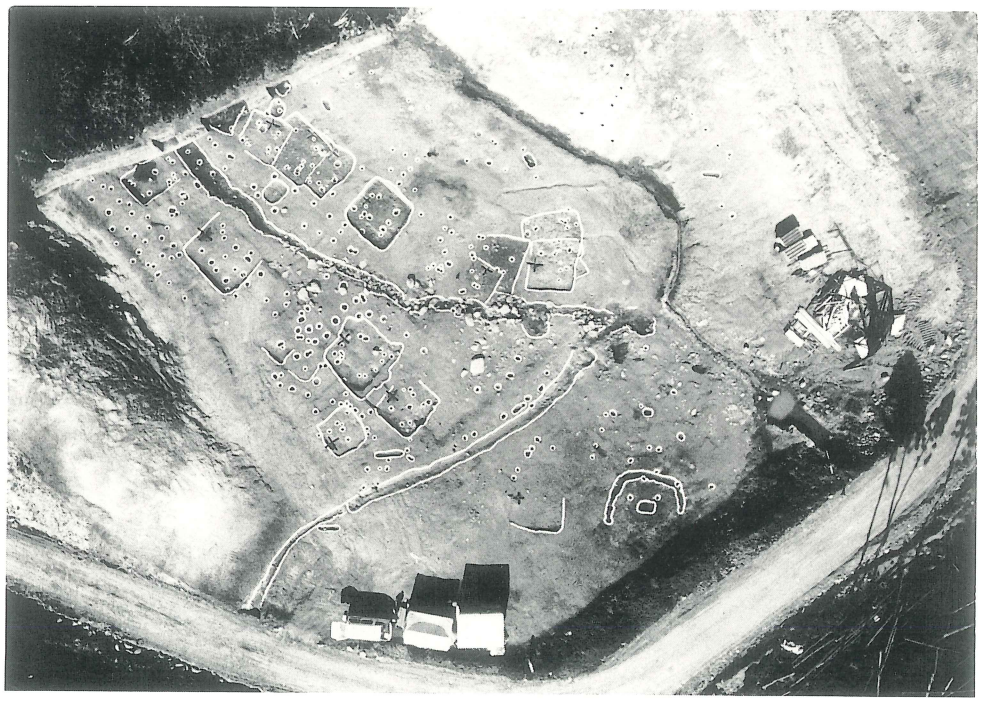


第37図　下綾垣遺跡１号墓主体部実測図

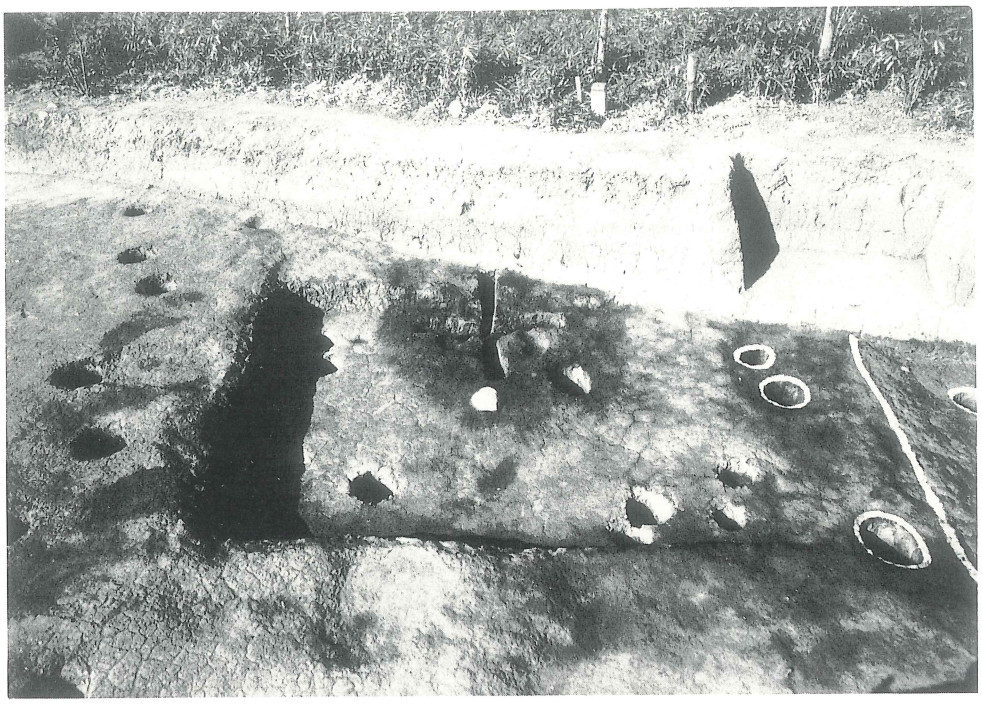


第38図　下綾垣遺跡１号墓主体部出土土器実測図

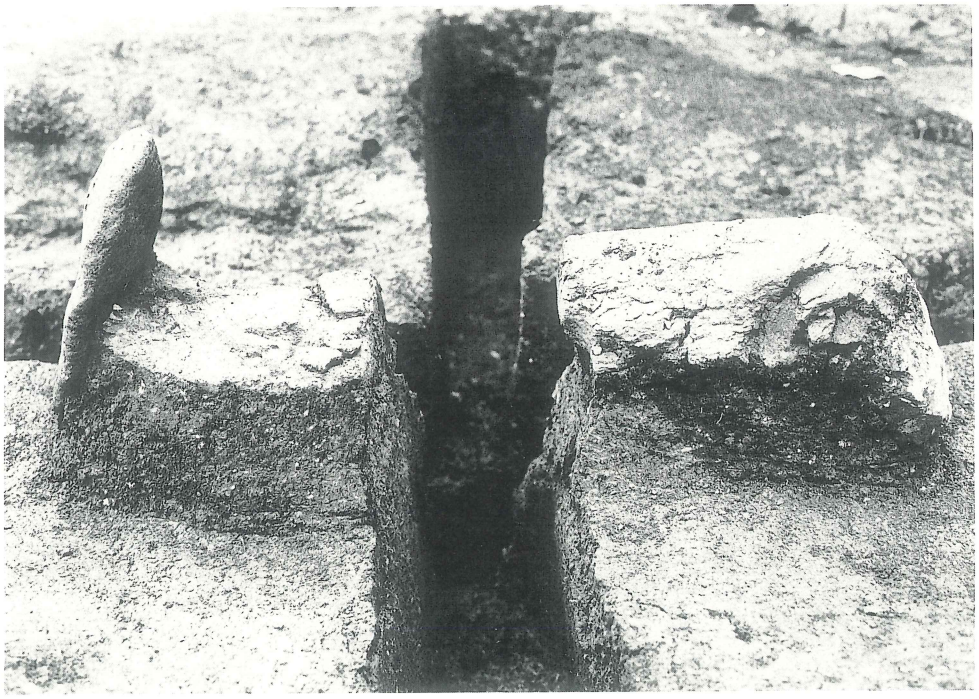
下綾垣遺跡遠景１



下綾垣遺跡遠景２



下綾垣遺跡５号住居跡全景



下綾垣跡５号住居跡カマド

下綾垣遺跡１号墓全景

下綾垣遺跡１号墓主体部

5.　池ノ原Ａ・Ｂ地区

・遺跡の所在地

玖珠郡玖珠町大字綾垣字池ノ原

・調査面積　1,300㎡

・調査の概要

池ノ原Ａ・Ｂ地区は、県道玖珠山国線沿い、太田川氾濫域より立ち上がる丘陵上平坦部標高約340～350ｍに位置する。

池ノ原Ａ地区は傾斜の緩やかな平坦部を中心に調査を実施した。

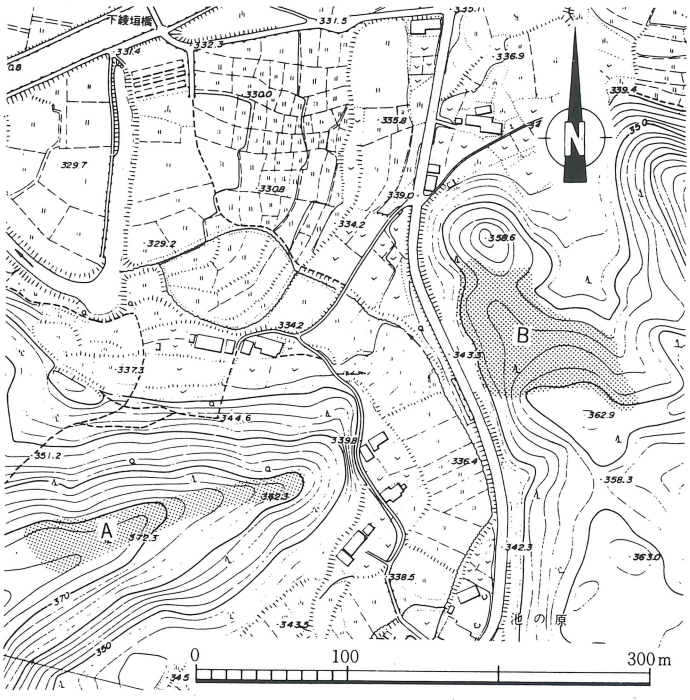
調査は表土除去作業後、遺構検出作業を行なった。堆積状況は表土層（腐植土20㎝～30㎝）～黒色土(20㎝～50㎝)～茶褐色粘質土(礫を多量に含む基盤層)の順に堆積していた。

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

池ノ原Ｂ地区はＡ地区より谷部を挟む一連の丘陵上平坦部で調査を実施した。

調査は平坦部と緩斜面にトレンチ17本を設定した。堆積状況は表土層（腐植土40㎝～50㎝）～明茶褐色土(70㎝～90㎝)～明茶褐色粘質土(礫を含む基盤層)の順に堆積していた。

調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。（染矢）



第39図　池ノ原Ａ・Ｂ地区周辺地形図

6．治別当遺跡

• 遺跡の所在地

玖珠郡玖珠町大字四日市字治別当

• 調査面積　26,900㎡

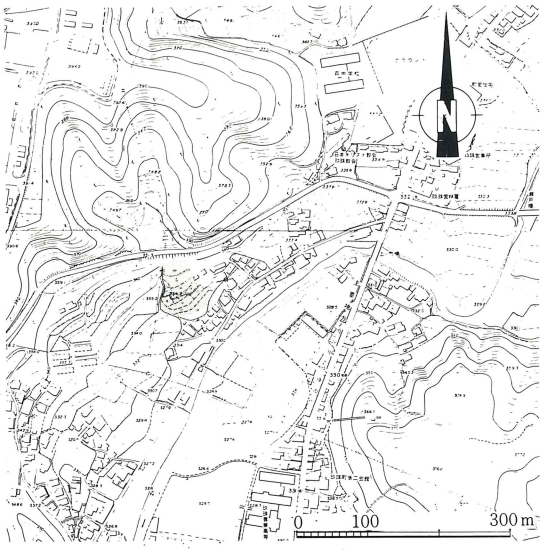
• 遺跡の概要

治別当遺跡は玖珠川支流にあたる森川西岸の河岸段丘上、標高約330mに位置する。

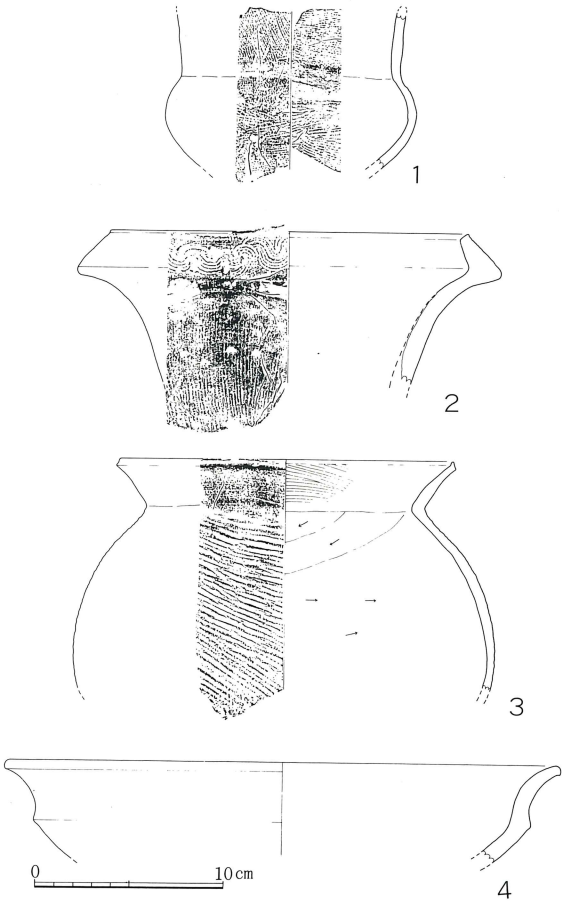
本年度調査は前年度B地区の調査を継続したもので、調査面積を1600㎡から3000㎡に拡大しB地区拡張区とした。

B地区は前年度の調査により、大溝1条、小溝6条を確認した。大・小溝は平面的には交差して観察されるが、切り合い関係は不明である。遺物については大溝砂礫層中より弥生時代終末から古墳時代初頭の土器片、及び流木、種子等が出土している。また、大溝南・北端には杭列を確認しており右岸沿い南北方向に60本を数える。

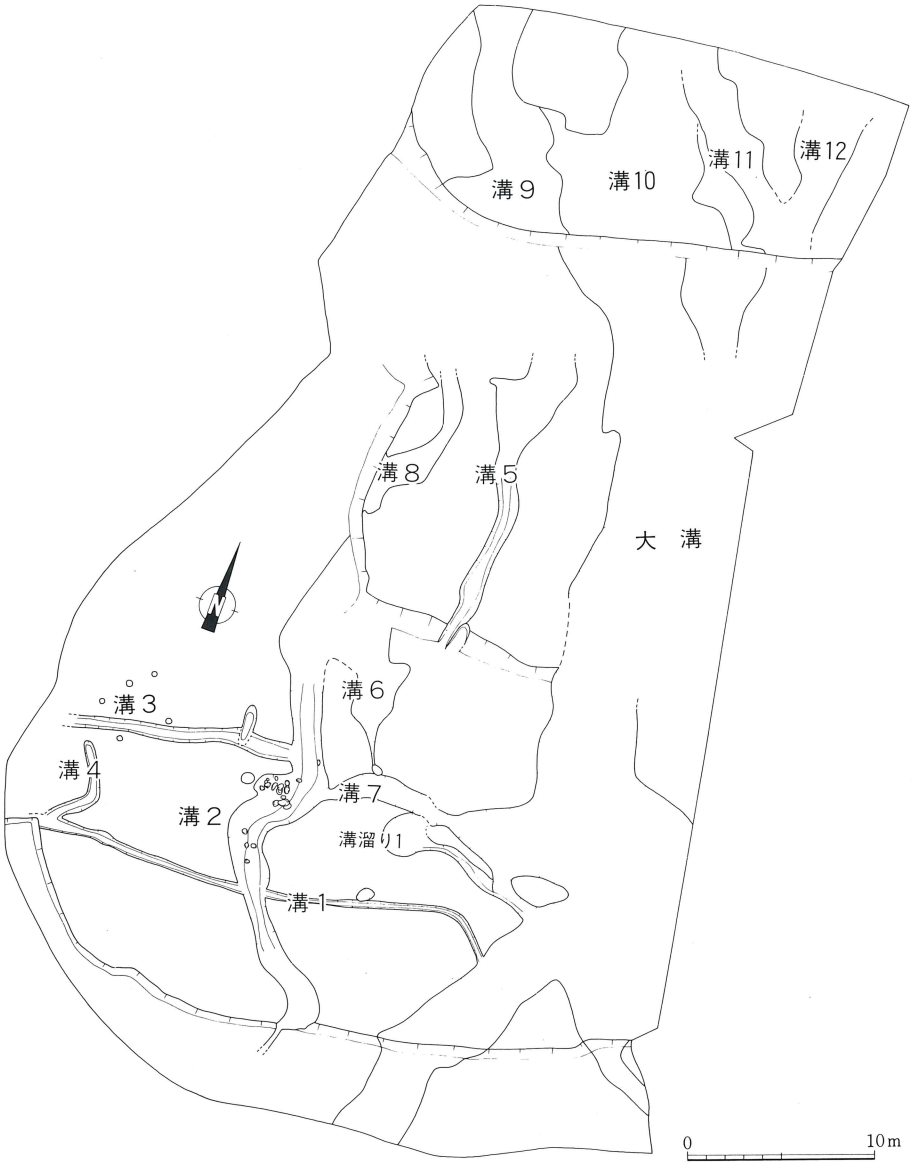
本年度調査は拡張区南・北端で実施している。北側には1m×18mのトレンチを設定して遺跡検出作業を実施した結果、大溝につづくと考えられる幅3m～4mの溝4条を確認、うち西側溝の砂層中より土器片、流木、杭列を検出した。南側では階段状の削平をうけており小溝2につづく溝底面を確認した。（染矢）



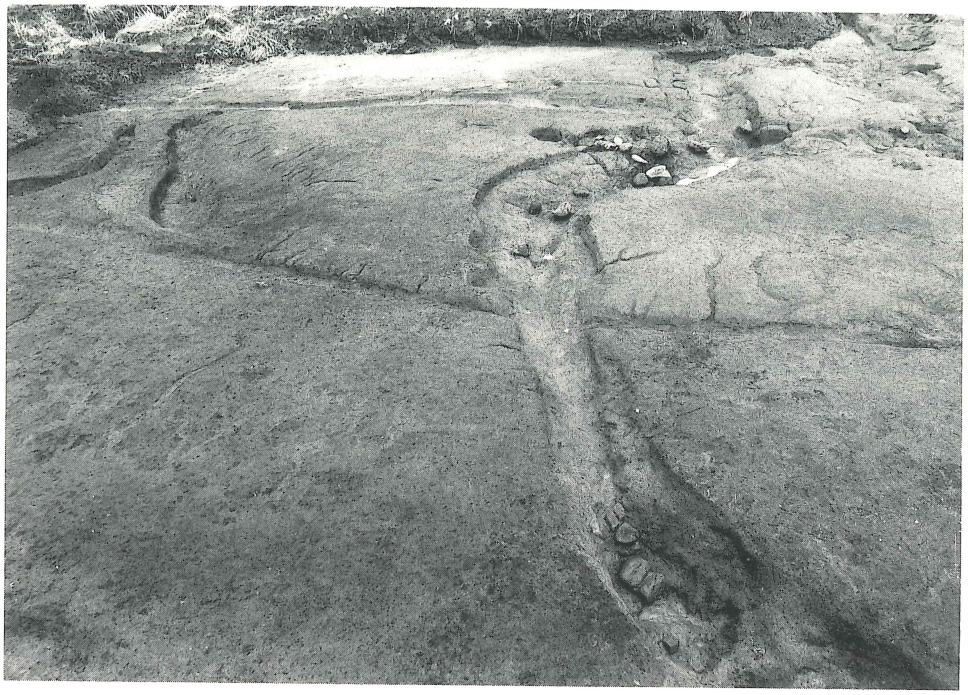
第40図　治別当遺跡B地区周辺地形図



第41図　治別当遺跡B地区出土遺物実測図



第42図　治別当遺跡B地区遺構配置図



治別当遺跡Ｂ地区溝２

治別当遺跡Ｂ地区大溝

7．瀬戸古墳群

• 遺跡の所在地

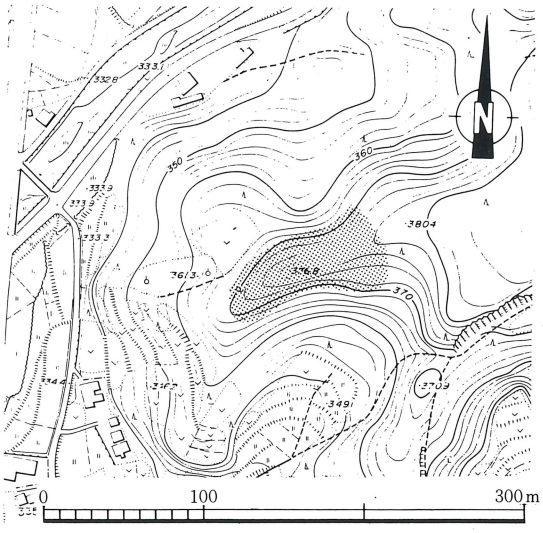
玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸

• 調査面積　　500㎡

• 遺跡の概要

遺跡は玖珠町南部の玖珠川の一支流である森川東岸375ｍの丘陵頂部にある。

遺跡の立地する丘陵は岩扇岳より南にのびる丘陵の先端部で眼下に盆地の谷部を望む。盆地と比高差は約40ｍを測る。周辺の遺跡としては森川を挟んで南西側の丘陵上には獣帯鏡片を副葬した石棺墓である名草台千人塚古墳が、丘陵斜面部には玄室内奥壁に朱彩による円文等を描いた鷹巣横穴墓群等がある。また、南西側低地部においては弥生時代終末から古墳時代にかけての水路や住居跡等が検出された治別当遺跡がある。



第43図　瀬戸古墳群周辺地形図

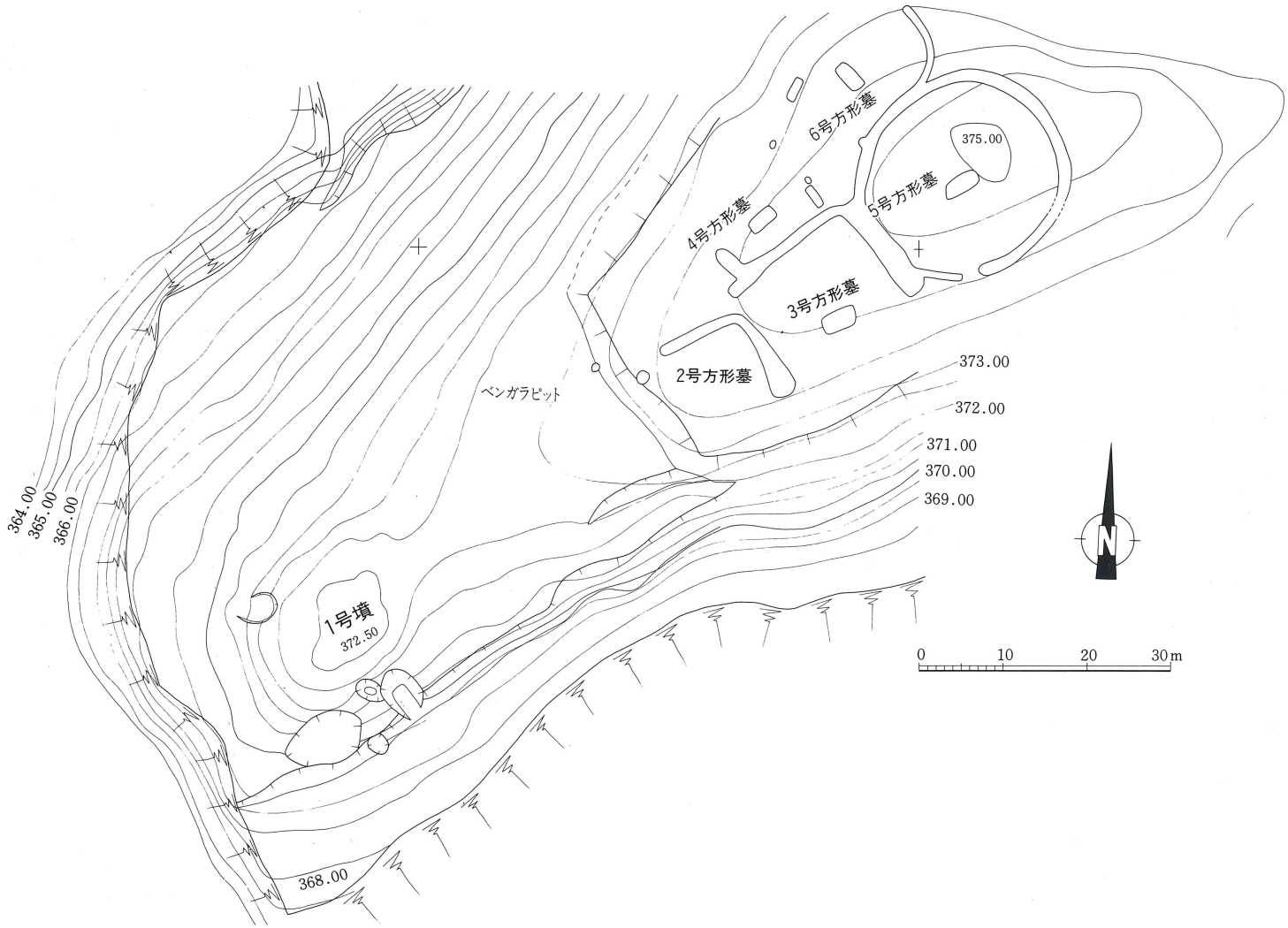
本遺跡は本年度５月の現地踏査によって円墳１基を確認し新たに調査地点とした。

調査は円墳のある丘陵先端部を中心に南西に延びる丘陵平坦部全体を行なった。その結果、丘陵先端では主体部に割石積みの竪穴式石室を持つ径16ｍ前後の高塚系円墳１基、中央より北東側にかけて溝を共有し合った低塚系方墳４基、同円墳１基をそれぞれ検出した。その他、丘陵中央付近の段落ち下面でベンガラの詰ったピットを検出した。時期は各古墳とも土器等の出土遺物が少なく明確さを欠くがほぼ４Ｃ後半～５Ｃ前半項のものと考えられる。

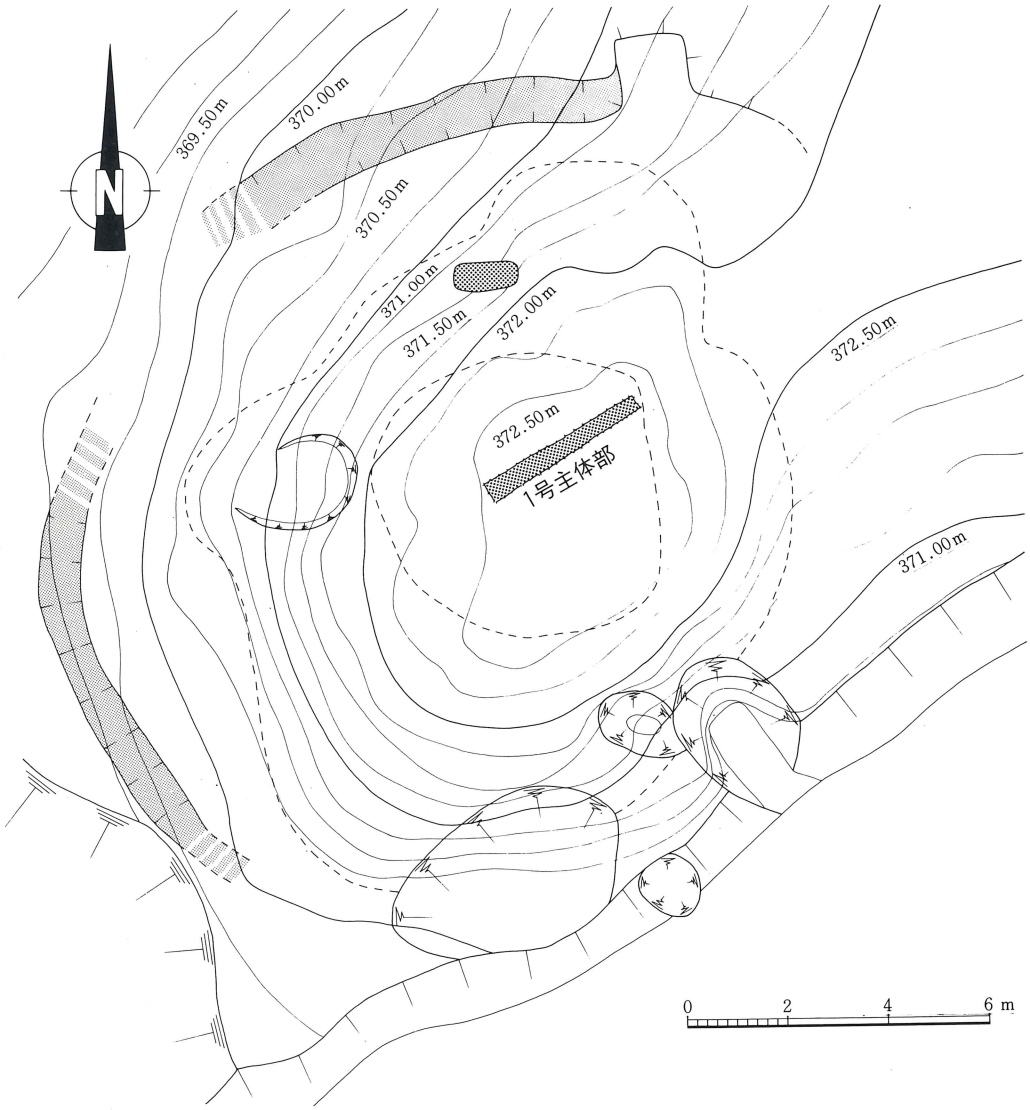
１号墳

墳丘　本古墳は南西に延びる舌状丘陵の先端に位置する。丘陵先端南側は削平を受けておりこの部分の周溝は認められない。周溝は幅0.4ｍ、深さ0.2ｍと浅く北東部と北西部のみが確認できた。周溝の範囲から推定して本古墳は径16ｍ前後、高さ2.5ｍの円墳である。

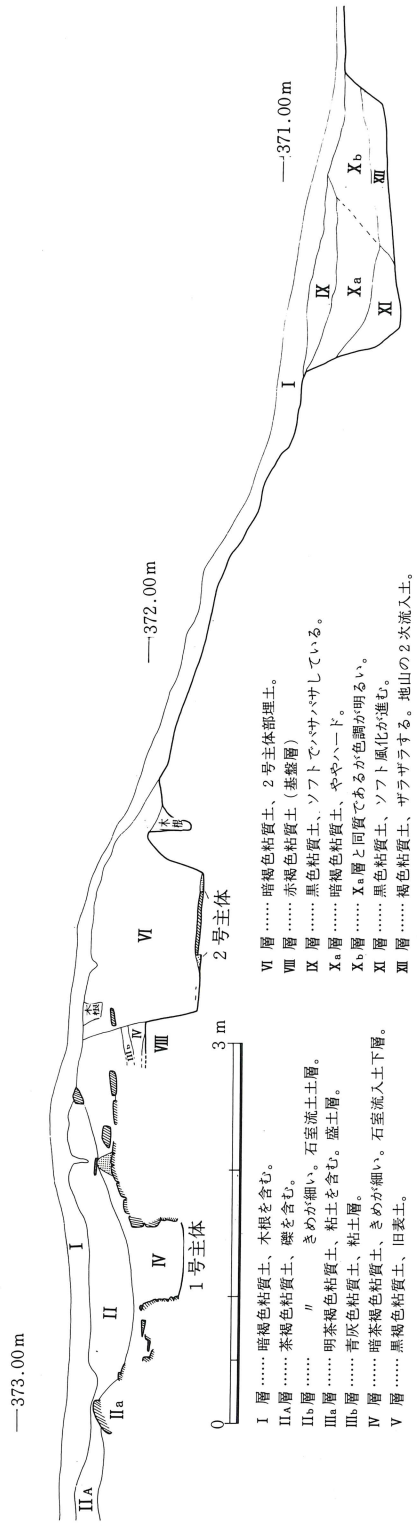
墳丘の北土層は第45図に示すとおりで墳丘は旧地表をカットして第１主体部の墓壙を掘り竪穴式石室を構築し、その後粘土と基盤層を互層にして石室を覆っている。さらにこの竪穴式石室を覆った層をカットして第２主体部の墓壙が造られている。この主体部は石蓋土壙墓である。墓壙埋土には暗褐色のやや風化の著しい土を埋めており、墳丘の上層風化土を再利用したと考えられる。



第44図　瀬戸古墳群遺構配置図



第45図　瀬戸１号墳墳丘図



第46図　瀬戸1号墳墳丘土層図

主体部

主体部は中央をわずかに北東に寄った位置に構築されている竪穴式石室とその北側にほぼ並行して位置する石蓋土壙墓である。

竪穴式石室は墳丘土の上層から掘り込まれた素掘りの土壙内に構築される。

墓壙は上縁で長辺4.5m、短辺2.3mの偶丸長方形を呈している。本古墳は撹乱を受けており残存していた2個の蓋石も原位置を保ってない。

石室は主軸方向をN−35°−Eにとり内法は長さ3.4m、幅0.5m、最大高0.3mを測るが、頭位になる南西側は若干幅広になっている。全て安山岩の石材を用い扁平な割石を小口積みしている。蓋石は盗掘によってほとんど散失しており、東側で長さ1.5m、幅0.3m前後の大型の石が2枚残っていたが原位置は留めてない。蓋石裏面に赤色顔料が塗布されている。

基底部は粘土床を平坦につくりその上に赤色顔料交じりの粘土を厚さ5cm前後全面に敷いて死床としている。石枕等の施設はない。

壁体の構築はまず頭位側の小口に3枚の板石を、足立側小口に6枚の板石を決め板石の小石を石室面にそろえて足位側から両側壁を並べるが、小口隅では小口石の端に側壁石の端がかかる。石室の壁面には全面に赤色顔料が塗布されている。

石室の控積みは比較的大振りな角礫を中心とし、隙間には部分的に白色粘土を填めている。

この石室構築に用いられた安山岩および玄武岩は岩扇岳に露頭しており近傍からの供給と考えられる。

石室内遺物出土状況

石室内は前述したように撹乱を受けており、ほとんど遺物が検出できなかった。そのような内でわずかに中央北側壁ぎわで鉄鏃が1本先端を頭位方向を向けて検出された。（村上）

瀬戸１号墳調査前全景

瀬戸１号墳主体部（竪穴式石室）全景

8.　瀬戸遺跡

・遺跡の所在地

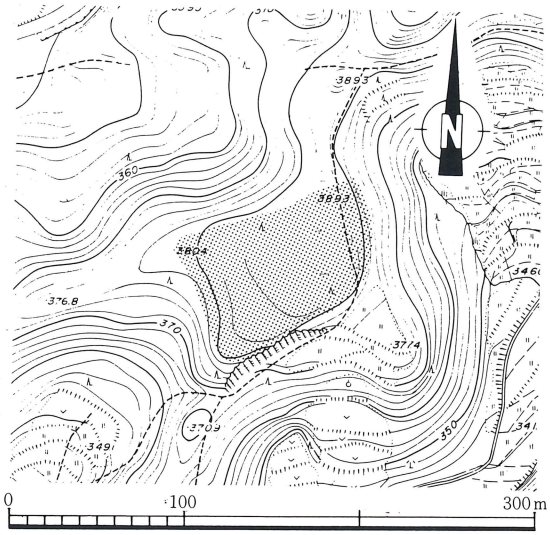
玖珠郡玖珠町大字帆足字瀬戸

・調査面積　2,200㎡

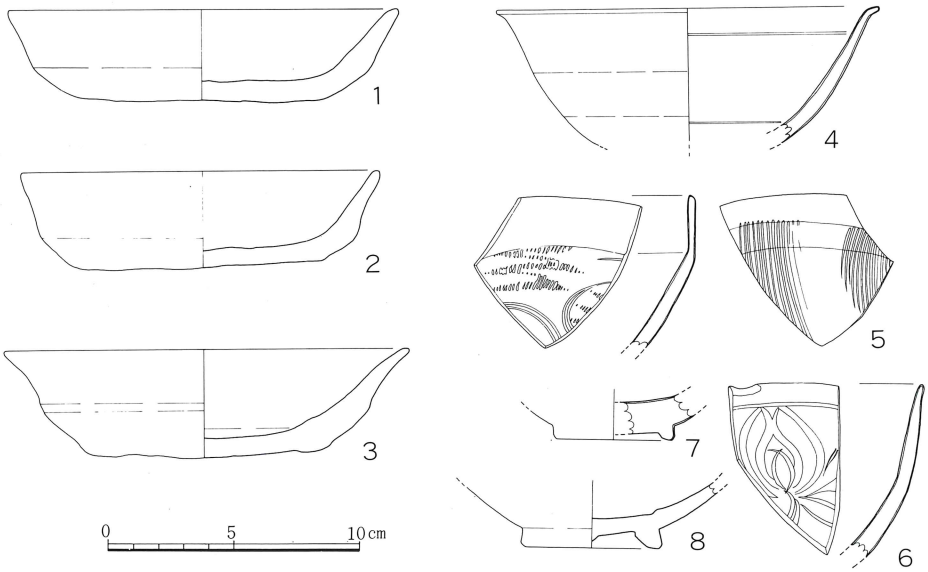
・遺跡の概要

遺跡は瀬戸古墳群のある丘陵北東側に隣接して位置する。谷を挟んで南東側には帆足氏の居城と推定されている帆足城がある。

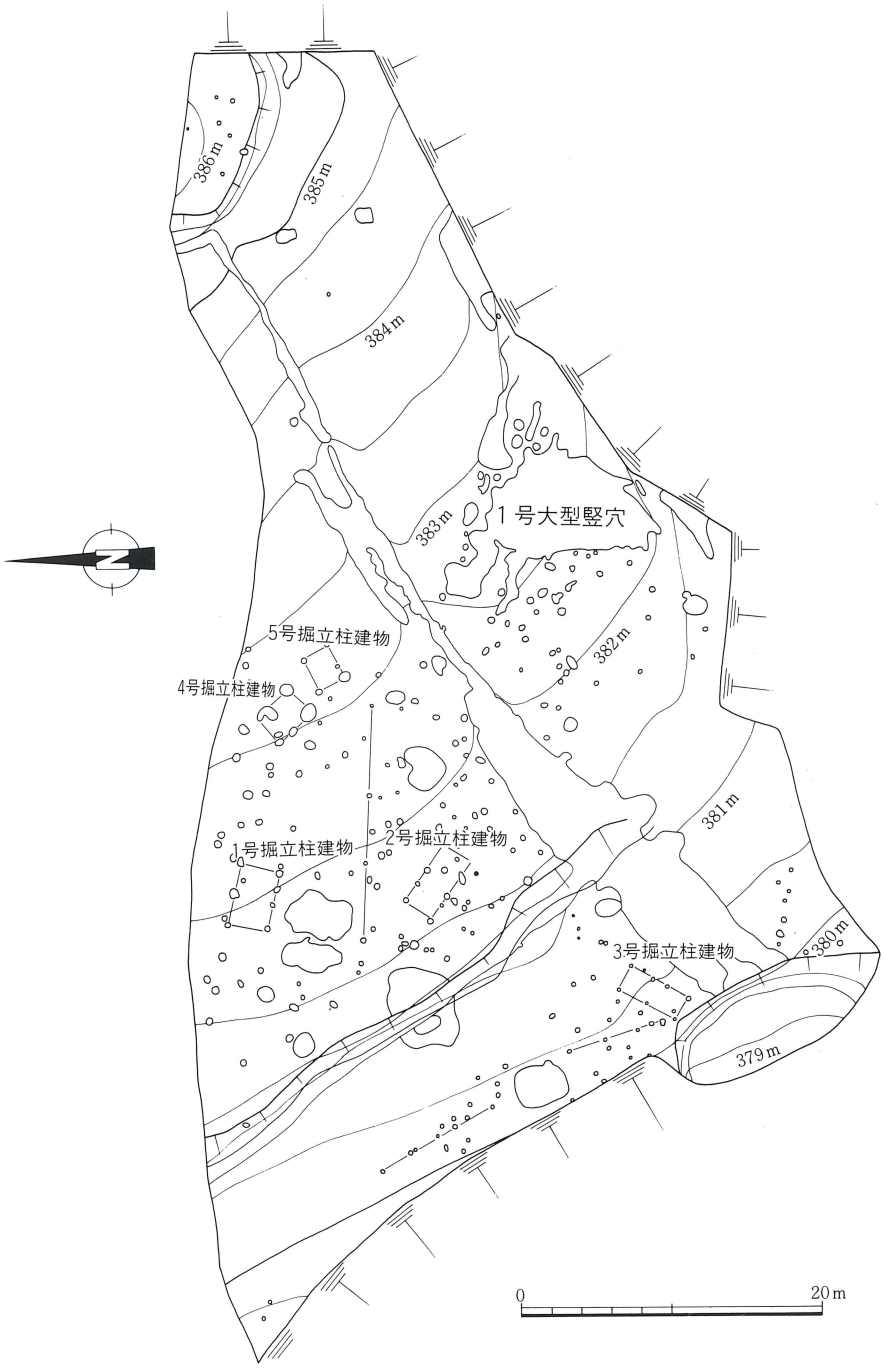
遺構は調査区中央に浅い溝一条とそれに直行する溝が西側で検出された。この溝に囲まれた区域で１間×２間の掘立柱建物２棟、１間×１間の掘立柱建物２棟が検出された。さらに溝の外側に１間×２間の掘立柱建物１棟、Ｌ型の不定形竪穴、馬歯骨が出土した土壙２基、多数のピット群が検出された。これらの遺構からは龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁等の碗・皿、土師器坏等が出土した。時期はこれらの遺物から12～13世紀頃である。また調査区西側において弥生時代中期後半の竪穴２基も検出した。（村上）



第47図　瀬戸遺跡周辺地形図



第48図瀬戸遺跡出土遺物実測図



第49図　瀬戸遺跡遺構配置図

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報
－日田～玖珠間－
第２集
後迫・大迫・白岩・下綾垣・瀬戸遺跡
１９９２．３．３１

発　行　　大分県教育委員会
印　刷　　東洋印刷有限会社